
麻帆良の軌跡

桜月の夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

麻帆良の軌跡

【Nコード】

N6409E

【作者名】

桜月の夜

【あらすじ】

学園長の一時のテンションにより、強制的に麻帆良学園に呼び寄せられた櫻井悠也。そして経緯もわからないまま麻帆良学園女子中等部3-Aに強制転入させられてしまう。悠也とネギと3-Aと、この先どんなことになるのか、学園長次第！？

第一話　麻帆良学園

とりあえず現状の整理から行ったほうがいいだろう。

俺は一体今どんな場面にいるのかと聞かれたら俺が逆に聞きたい。

ただ答えられるとしたら、視界が真っ暗だということだけである。

『麻帆良の軌跡』

「ふおおおお…」

見事に生やされた口ひげの感触を確かめながら老人が笑う。

老人は現麻帆良学園学園長近衛近右衛門である。

学園長の前には魔方阵が広がっている。

「全く…学園長も人が悪い…。そんな急に呼び出すなんて…」

と、20代後半のダンディー100%の男性が煙草を吸いながら笑っていた。

高畑タカミチである。

「確かに…彼には少し悪いのう」

と、悪意のかけらがミクロ単位も感じ取れない学園長の表情であった。

タカミチは魔方阵をずっと眺めている。

すると、ドアがノックされ、勢いよく人が入ってきた。

「よく来たのネギ君」

ネギと呼ばれる少年は、ぎこちなくスーツを着て、学園長室に入ってきた。

息を少し切らしながらも少年の笑顔を絶やさずに学園長とタカミチにスマイルビームを送っている。

ネギはキョロキョロと周囲を見回した。

「あの…新しい転校生というのは…」

「ふおお。もう少し待っておれ」

そついうと魔方陣の輝きが増した。

次の瞬間。少年が一人現れた。

「久しぶりじゃの」

「あ…お久しぶりです学園長…」

俺と学園長は他愛もない挨拶を交わした。

「…じゃねえだろ！」

俺は叫んだ。

部屋でさあ学校に行こうと仕度をしていたらいきなり眼前が真っ暗になるは、なんか身動きまで取れなくなるわで気がついたら学園長室にいたのだ。

とりあえず叫ぶことにした。

「まあまあ…落ち着くんじゃ」

「これが落ち着ける状況か！」

俺は俺が通う中学校の制服の外れているボタンの一つを止めて再び叫んだ。

よく見ると高畑先生と見慣れない子供が俺をマジマジと見つめている。

そんなに俺が珍しいか？ 人をそんな目で見るんじゃないぞ少年よと、俺は肝心なことに気がつく。

「じじい！ てめえ一般人の子供の前で何魔法使ってやがるっ！」

俺は学園長の胸倉を掴み持ち上げる。

思ったより重かったので途中で持ち上げるのは投げ出した。

学園長は驚きの表情をしていた。

まさかそんなことに気づかなかったのではないかと俺はキレ気味だったが、使用念が俺と学園長の間に入る。

「あの… 僕も魔法使いだから大丈夫です」

……。

魔法使い？ この子供が？ ホワイ、なぜ？

どう見てもただの10歳くらいの子供じゃないか。

これのどこが魔法使いというのだ。

「いや、本当じゃよ。君は同じ魔法使いなのにそんなこともわからないのかね？」

と、学園長がいや、挑発的に言ってくる。

なめるなじじい。俺だって魔法使いの端くれだ。こんな子供でも魔法使いと魔法使いじゃないかなんて… って… あれ？

よく感覚を凝らしてみるとこの子供からは魔力が感じ取れるではないかるしかも強力な。

なぜ？ そんな疑問には高畑先生が答えてくれた。

「彼はあのナギ・スプリングフィールドの息子だよ」

「え…！」

ナギ・スプリングフィールド。別名サウザンドマスターの千の魔法を使いこなすといわれる魔法界では知らないものはいない、最強の魔法使いだ。俺もその人に憧れて魔法使いを志したんだ。

その息子がここにいるのだ。これは何かの縁。御利益あるかもしれない… 拜んでおこう。

俺の不自然な行動に少年は疑問を抱きつつ、

「ネギ・スプリングフィールドです。よろしくお願いします」

と、愛想よく笑顔で挨拶してくれた。

やはり子供の笑顔には魅力があるというかなんというか…。とりあえず年下の子供に先に自己紹介されたのでこちらも負けじと愛想よい態度で自己紹介をした。

「櫻井悠也^{ちくろいぬ やつぬ}だ。よろしくな」

と、がんばって愛想よい態度を振舞った。

とは言ったものの、俺は自分で言うのはなんだが表情は硬い。あまりいい笑顔はできてないだろう。

だが、ネギ君は笑顔を返して「よろしくお願いします」といつてくれた。

こんな子が弟なら…と勝手に妄想を抱いていると肝心なことを思い

出す。

「そういえば…なんで俺ここにいるんですか？」

「いい質問じゃの」

それしか思いつかないだろ。この状況じゃあ。

「実はそのネギ君が担任をする3-Aに転入していただこうと思つての、来てもらったんじゃない」

いろいろと突っ込みたいことは心の中でしよう。とりあえず…

「なに〜!？」

と叫んだ。ま、お約束だろ。

ここで突っ込んでおこう。

ネギ君はなぜ若干10歳で教師をやっているのか、なぜ今まで通っていた学校をほったらかし、この麻帆良に通わなければならないのか。数々の疑問と突っ込みに心の中を奪われつつ、俺はその疑問の説明を学園長に虚ろながらに聞いていた。

「いやあ…楽しみです。やっと僕のクラスにも男性が…」

多少ネギ君が引つかかることを言っていたが…まあいいだろう。

俺は虚ろながらに聞いていた学園長の語りを放置し、ネギ君とその3-Aとやらに向かった。

「そうだネギ君。クラス名簿見せてくんない」

「どうぞ、悠也さん」

俺はクラス名簿を受け取った。

なにやらオリジナル感満載な気がするが気にしないでおう。俺はクラス名簿を開く。次の瞬間硬直した。

「どうしました悠也さん？」

ネギ君の気遣った言葉さえ耳に届かなかった。

俺はクラス名簿を見て驚いた。なんか全員が女子であつた。

そう、俺の転校先は麻帆良学園女子中等部であつた。

テンションとは上がりだせばどこまでも上がるが上げるまでがつらいものだ。

だが今回の俺は違う、俺はテンションケージマックスだつた。

名簿を見渡しても可愛い子たちのオンパレード。ツンデレっぽい子やお嬢様系の子、まさに女子の魅力を凝縮でもしたかのような魅力的な女子がそろっていた。

俺の地元の学校はデカメガネのおさげの子や、出っ歯の子など人間的にも女性的にも終わっている子しかいなかったからな。

サックス校長。俺の青春ありがとう。

俺はこれからどうやって軽くラブコメになりそうなのこの日常を過ごすかひそかな妄想と首脳会議に明け暮れていた。

そんなこんなで気がついたら3 - Aの教室にたどり着いてしまったのである。

いざとなったら緊張してしまう。緊張の波が津波レベルで俺に押し寄せてくる。誰かこの胸の高まりを止めてくれ。100円やるから。ネギ君は一足先に教室に入りHRを行っている。ネギ君は次に転校生の話題を持ち出した。俺の緊張のパーセンテージがどんどん高まっていく。そして…俺が教室に入るときがやってきた。

覚悟を決め、俺はドアを開け、教室に入る。勢いよく入ったのはいいが、何やら周りがスローに見えるなあ。緊張が度を越したのだろうか。いや違った。次の瞬間、俺は床に顔を打ちつけごろごろと転がっていった。

「いつつ…」

頭を押さえながら起き上がるとたらいが降ってきた。頭の上に星マークを浮かべながら俺は教卓に向かった。

「…随分と手荒い歓迎だな…」

「悠也さん。僕もやられましたよ」

と、ネギがフォローかどうか分からないフォローを入れてくれた。俺はとりあえず自己紹介からはじめた。

「櫻井悠也です。よろしく…」

さきほどまでのテンションはどこにいったのかね。俺は疲れきった声で挨拶をした。

しまった。もう少し愛想よく言えばよかった。

が、3-Aのみなさんはとても暖かく出迎えてくださった。

俺が男子だということもどことなく受け入れてくれたようだ。一人を除いては。

「ちょっと待ってよ…」

ツインテールをなびかせながら俺に近寄ってくる女子が一人。

「なんで女子校に男子なのよーっ！」

いきなり胸倉を掴むやいなや俺を持ち上げた。

ここで俺のプロフィールを紹介しよう。

身長175cmの体重57kg。細身だが筋肉もある。背も高い。

だが、このツインテール怪力少女は俺を片手で軽々と持ち上げやがった。

いわゆる一つのバカ力だろう。

「なんですってーっ!？」

しまった。口に出してしまったようだ。

俺を締める手が一層きつくなる。

「あ…アスナさん落ち着いて…」

「これが落ち着いてって？ ふざけんじゃないわよ！ アンタが来るわ今度は男の転校生やらで…どうなってんのこの学校は!？」

俺が聞きてえよ。

「私は認めないからねっ!！」

それだけ言っただけでそのツインテール少女は自分の席に戻った。

どつやら俺が思ったような学園生活は描けそうもない。

第二話　学園生活

ラブコメ風に始まった俺の学園生活。

期待に胸躍らせ教室へと向かった俺であった。

教室まではよかったのだが、クラスの皆様が、女性が考えるには少々野蛮な手荒な歓迎で迎えていただいたことに始まり、ツインテールの少女、ネギ君が言うに「アスナさん」といつてたのでアスナさんだが、なんの罪もない俺の胸倉を掴み優々と持ち上げてくださったのだ。

これからの学園生活への期待などというものはいつものまにかどこかへ忘れ去り、この麻帆良学園でも学園生活の不安でいっぱいだった。

『麻帆良の軌跡』

あまり無事ではないが、とりあえず朝のHRも切り抜け、なんとか放課後にいたる。

その間にアスナさんによる物理的攻撃の数々が飛び交ってきたりしたのだが、委員長の名の下になんとか俺を守ってくれた。とりあえず委員長には祈っておいた。御利益あるぞ、多分。

そんなわけで今俺は中庭のベンチでひたすら無駄な時を過ごしているのだが、当然の如く、右も左も女子、女子、女子。部活動青春を注いでいるお年頃の女子中学生の姿をずっと眺めていた。

途中、テニスコートに向かい、お約束の物目の教養を測ろうと思ったのだが、女子テニス部のエースと思われるお方の見事なコントロールのスマッシュが俺の局部にクリティカルヒットし、数分間狭間の世界をさまよっていた。

とりあえず立ち直った俺はさきほどの定位置戻り、再び女子の干渉に浸っていた。
と、そこに。

「なにしてるんですか悠也さん？」

汚れなどとは無縁な純粹無垢のお子ちゃま先生、ネギ・スプリングフィード君じゃありませんか。

こんな汚れた男の世界に一体何用で？

と、後ろを見てみると予想外の人物が付いていた。

「か…神楽坂さん…」

金魚のフンみたいにネギ君の後を付いてきたこのツインテールツンデレ少女（ツン8に対してデレ2くらい）は、ルックスだけならギヤルゲーに登場させても無問題なのだが、なにぶん中身が以上にお

かしい。

なにせ片手で男を持ち上げていらっしやるくらいですから。

アスナさんは、とっても機嫌の悪そうな顔で俺を睨んでいる。

アスナさん。女性はそんな形相をしてはいけません。もっといい表情をしないと。

「んで…ネギ君はなにしてんの？」

ふと、気が付いたので言ってみた。

「あの…アスナさんに頼まれて魔法でホレ薬を作り…」

ホレ薬。魔法を使って調合する薬のことだ。

ちよつと待て。今ネギ君は確かに魔法といった。

んで、目の前にいらっしやるのは仁王像も恐れをなして逃げ出しそうな形相を俺限定で向けてくださる、紛れもない一般人の端くれ、神楽坂アスナさんである。

一応確認を込めてではあるが、魔法は基本的に一般人には秘密なのである。

一般人に魔法がバレたら、基本、おこじよにされてしまう。だがこのネギ君は明らかにバレている。しかも平然としている。

…まさか。

「ネギ君…おこじよになりたいのか…？ だからこんなことを…」
「違いますっ！！」
「んじゃあ…なんで？」
「えっと…魔法使っているところに丁度アスナさんが…」

俺は愕然とした。

憧れの魔法使いの子供はなんと早速一般人に魔法がバレているのだ。
憧れる人間違ったかな、俺。

「…っわけだから、アスナさん魔法のことはできるだけ内密に頼みますわ」
「……わかってるわよ」

やはり無愛想である。

「…んでホレ薬はその口止め料みたいなもんか」
「まあ…はい」
「誰にホレてんだ？」

沈黙が走る。

そんなに言いたくないのだろうか？
アスナさんはほのかに頬を赤らめている。
それでももう少しおとなしかったら完璧なのに。

ネギはアスナさんに合図を取り、どうやら了承を得たようで、重い口を開いてくれた。

「あの…タカミチにです」

多少ことには覚悟していたが、堪えようとした笑いが一気に噴出したね。

余談ではあるが俺がアスナさんに見事な拳を腹部に叩き込まれたことをあえて語るまい。

とりあえず状況の説明から入ろうではないか。

どうやらネギ君はアスナさんにホレ薬の調合を命じられたらしいのだが、どうやら自分ひとりではできないので手伝ってくれる人を探していたらしい。

とはいっても、一応は違法のホレ薬の調合を手伝ってくれなど、自ら事前に犯行します、といっているようなもので誰にも頼めずに困っていたらしい。

そうしてとぼとぼと中庭を歩いていると、女子中学生に熱い視線を送っていた俺、櫻井悠也を発見したらしい。

ネギ君は早速俺に手伝いを頼んできたのだが、さすがの俺もわざわざ違法なことに手を貸す気にもなれず、断ろうとしたそのとき、アスナさんの殺気120%の視線を感じ、俺は断るという行動を忘れ、ただただ了承したのだった。 情けない俺…。

というわけで、現在俺たちは放課後のすっからかな3-Aの教室にいる。

俺はいまだに残る腹部のダメージと戦いながら、ネギとのホレ薬作成についての口論を述べていた。

「つまり…材料は全部そろってるのか？」

「はい」

「つーことは後なにながら必要なんだ？」

「もう一人…強力な魔力を持つ人が…」

なるほど。

それで俺に声をかけた訳ね。

確かに俺は魔法を使えるし、当然魔力もある。

それほど自信はないが…。

とりあえず俺はネギ君にホレ薬の呪文詠唱を習う。

俺のからっぽの頭でもなんとか記憶できそうだ。

とりあえず俺とネギ君。呼吸を合わせて詠唱始める。

数秒間の詠唱が終わり、触媒に入っていた薬がホレ薬のようなもの
に変わったようだ。

ネギ君は喜びながらこそその触媒を手に取り、アスナさんに自慢して
いる。

ふと、あることに気がついた。

「そついえば…どうやって飲ませるんだ？」

……。

長い沈黙。ネギ君は冷や汗がだらだらと流れ、アスナさんは頭を抱えている。

駄目だなこの計画。

口論に口論を重ねた結果、コーヒーに入れることになった。

ネギ君の強引な押しにより、高畑先生を、アスナさんが入れたコーヒーを飲んでほしい、という理由で呼び出したのだ。

さすがは少年スマイル。先生もイチコロだぜ。

そんなわけで一行はカフェの一席に座っている。

「あ…あのっ…、飲んでみてください高畑先生」

先ほど俺に見せた鬼神のような態度はどこにいったのやら。

完璧に猫をかぶっていやがる。高畑先生も簡単に騙されすぎですよ。本当のアスナさん見てみてください。鬼ですから。この人の前世鬼とかが相場ですから。

と、心の中で突っ込みの乱舞を繰り広げているうちに高畑先生はコーヒーカップに手をかける。

「いやぁ…嬉しいねえ。アスナ君の入れたコーヒーか…うん、楽しみだ」

「いえ…そんな…」

高畑先生はダンディースマイルを無料で俺たちに振舞っている。アスナさんかというと、そんな高畑先生の笑顔に夢中で、ネギ君はそんな二人をおろおろと見守っている。

俺はといえば、つまらなそうに二人を見守っていた。

高畑先生がコーヒーカップを口につけようとしたそのとき、携帯の着信音が鳴る。

高畑先生の携帯だった。

コーヒーカップを置き、携帯に出る。

「もしもし、はい、はい。わかりました。すぐに向かいます」

高畑先生は携帯を閉じるとコーヒーを飲まず、椅子から立立ち上がる。

「すまない。急な用事ができてしまった。残念だけどまた今度でいいかな？ アスナ君」

「え…あ、はい」

「そうかい？ よかった。それじゃあまた今度！」

高畑先生は笑顔を浮かべ、走り去ってしまった。

「…いつてしまいましたね」

と、ネギ君が一間置いて言う。

アスナさんは力なく返事をした。俺にはよくわからないが、好きな人に相手にしてもらえないのはけっこう寂しいのであろう。アスナさんは俯きながら椅子を立った。

ところ変わってここは麻帆良の森の入り口近く。

とぼとぼ歩いていくアスナさんについていくとこんなところまで来てしまったのだ。

暗い。

もう夕方である。

夜の麻帆良の森はどことなく雰囲気をかもし出していた。

「んで…いつになつたら帰るんだ？」

「わかったわよ。いつまでいてもしょうがないわよね。帰りましよう」

やっと決心してくれたようだ。
一度フラれたくらいでそこまで落ち込むこともない。
また新しい人を探せばいい。

やっと帰れると重い若干テンションに高まりのある俺とネギ君だった。

ふと、アスナさんが森の方わ振り向く。

「どうしたんですか？」

「…今何かいた」

何を言ってるんだこの人は。
頭がおかしくなったか？

「今何かいたの！」

そういつてアスナさんは森の中に駆け出していった。
俺とネギ君もうかがなくついていった。

麻帆良の森は基本的になんの生物もないし、あまり人は近づかないらしい。だったらなぜ作ったのかという話だ。

もしや幽霊ではないのだろうか。

いやいやいや。いやいやいやいやいやいや。
ありえないよね、幽霊。存在するはずないよね？

誰に問いかけるわけでもなく、俺はひたすら必死に苦手な幽霊の存在と奮闘していた。

気がつくときすっかり奥まできたものだ。

どうやらアスナさんはその何かを見失ったようだ。
非常にべたな展開ではあるが、こういう場合、間違えなく迷っている。ここが何処だかわからない。

さて…どうやって帰ればいいんだろう？

と、三人で悩んでいた。

「……！」

背筋が本当に凍るかと思った。

それくらいの悪寒が走った。

この感じは魔力。どうやらネギ君も感じ取ったようだ。

まがまがしい魔力。

俺やネギ君のような善ある人間とは違う感じ。

そんないやな感じの魔力が周囲に漂っている。

ふと、辺りを見回すと、キラリと光る瞳があたりを囲んでいた。

俺は叫んだ。

「魔獣だ…！」

「なんですか魔獣って？」

「説明する暇はない。ただ…こいつらは敵だってことだ」

ネギ君は杖を構え、アスナさんに下がってと言う。

10歳の少年とは思えない頼もしさだ。

ではお言葉に甘えて隠れさせてもらおう。

「…って何してるんですか悠也さんっ!？」

「…え？ 何って隠れようと…」

「ちよっ…一緒に戦ってくださいよ」

「…マジで？」

「マジですー！」

ちよつと待とうぜネギ君。

自慢じゃないが俺には度胸などはないぞ。

今までもみんなに助けてもらって戦っていたくらいだからな。

俺が魔獣と呼んでいたのは狼である。

とはいったものの、その狼は通常の狼の数十倍はまがましい気を放っているが。

ネギ君は杖を構え臨戦態勢に、俺は引けた腰でアスナさんと後ろにいる。

第三話　臆病な戦士

ガタガタブルブル。

ガタガタブルブル。

俺は現在進行形で震えている。

いや、違うんだこれは。これは…そうだ武者震いだ。

これからこの魔獣どもをどう料理するかと考えると思うとゾクゾクして震えているんだ。

そうだ。じゃないとこの俺が魔獣如きで膝がガクガクになるわけがない。

まるで臆病者じゃないか。

「その通りでしょうがっ！」

アスナさんの鋭いツツコミにダメージを感じながら俺はネギ君の経緯を見守ることにした。

しつこいようだが言っておこう。

俺は怖くて戦えません。

『麻帆良の軌跡』

狼の魔獣どもがまがまがしいまでの魔力を存分に解き放っている。普通の一般人ならこの魔力を”当てられる”だけで最低でも気絶す

るはずなのにアスナさんは平気そうな顔である。俺とネギ君は魔力を持つてるし力もある。魔獣程度の魔力はどうってことないが、さすがはアスナさん。人間離れしているというか…。

というか、さっきから狼さんたちの目線がどうも俺にだけ送られて
いるのは気のせいだろうか？

いや、そうだ。この狼共ネギ君やアスナさんのこと眼中にねえ。
最初っから俺狙いじゃねえか。

と、油断していると狼の一匹が俺に飛び掛る。
俺は情けない声を漏らし身を屈める。
あ、早速終わったな。

「魔法の射手！」

狼が吹き飛ばされる。

おお、さすがは魔法先生！ 頼りになります。
ネギ君は光属性の魔法の射手で狼を撃退した。

しかし、狼の数も多い。

一体倒したところでどうにかなるわけもない。
狼は一気に襲い掛かってきた。

「二人は逃げてくださいっ！」

と、ネギ君が狼と奮闘しながら叫ぶ。

アスナさんは逃げるか逃げないか悩んでいる。

甘いぜアスナさん。そんな甘い考えじゃ戦場じゃすぐに死ぬぜ！

じゃあネギ君。俺はお言葉に甘えて… ってあれ？

狼さんはなんと俺たちを囲んでいた。どうしよう。

逃げ場を失った俺は狼の猛攻にひたすら逃げ抜いている。ものすごくかつこ悪いが生きるためだ。しょうがないじゃないか。

途中転んだりしながらも俺は狼の猛攻をなんとか凌いでいた。

アスナさんかというとネギ君の後ろでなんと襲ってくる狼に蹴りを入れている。

先ほどの通り、一般人は魔獣の魔力に当てられると気絶は確実だ。触れるなんてアウトである。

しかしアスナさんはどうだろう。狼魔獣さんを蹴っては構え蹴っては構えて狼に備えている。

これではどちらが男なのかわからない。メンツ丸つぶれである。

ネギ君は、さすがである。

狼の猛攻に辛うじてだが、確実に攻撃を凌いでいる。だが、俺やアスナさんを守りながら戦う分隙ができて始めている。

なんでそこまでやる？
なんでそこまで守る？

俺はほとんど他人じゃないか。
まだ出会ったばかりだし、お互いのことほとんど知らない。

なのになぜ守る？
なんでそこまでするんだ？

さきほどまで好戦していたネギ君も体力に限界が見え出した。
そして、一体の魔獣に攻撃され、傷ついた。

ドクン…。

なんだこの気持ち？
今までに無い…。この気持ち。

ネギ君は傷ついても尚、戦っている。
だが、もう限界である。

杖を弾かれ、無防備になる。魔獣がすぐ傍まで迫る。

ドクン…。

まただ。この感じ。

よくわからないけど、胸の中が熱い。

ドクン、ドクンと心臓がバクバクいつてる。

けど、不思議な感じだ。嫌じゃない。

なぜだろう？

ネギ君が狼に襲われそうだ。

アスナさんは必死に庇いに行く。

俺も行かなければ。けど怖い。

あれ？ 怖くない？ なぜだろう。怖くない。さっきの不思議な感

じ、そのおかげだろうか。恐怖を微塵も感じない。

今なら、いけそうだ。今なら、守れそうだ。

そうだ、守りたい。

今俺はネギ君を守りたいんだ。だから俺に力をくれる。だから俺に勇気をくれる。

もう駄目だ。そう思っでネギは目を閉じた。

すると目の前の狼はすべて消えていった。

啞然としながらネギはその狼を消し去った主を見た。

悠也が決意の表情で刀を握っていた。

第四話　守りたい強さ

ネギ君が狼に襲われそうになった瞬間、俺は刀を出した。
俺の刀は普段は”ここ”にはない。

魔法による簡易の召喚術により、”ここ”に刀を呼び出す。
体が軽かった。

守りたいとここまでになれるのかと、俺は関心した。

今度は、俺がネギ君を守る番だ。

『麻帆良の軌跡』

狼は獰猛な顔で俺を睨んでいる。

さっきまで怯えていた俺が嘘みたいだな。

狼は一気に襲いかかってくる。んじゃ、こっちも行くか。

「衝破刃！」

気を刀に集め放つ技である。

俺は技は我流である。魔法は習ってはいるが。

我が家では、刀などの野蛮な物に頼るなという頑固な親父のせいで
剣を習えなかった。おかげで我流である。まあ、我流にしてはよく
できている気がする。

狼は衝撃波がまた放たれるのではないかと距離を置いた。

さすがは魔獣だ。賢い。
しかし、距離を置いたからといって、俺の攻撃が避けられるわけではない。

「翔旋陣！」

気を一定の場所に収束、一気に解き放つ技である。

気の集中は魔力以上に集中力がある。

魔法使いは魔法を唱えるのに魔力を集中しなければならない。魔法使いは大体が距離を置き詠唱に余裕ができるが、俺のような近距離戦の人間にはそうもいかない。

常に敵の攻撃を気にしながら戦わなくてはならない。

俺は周囲の狼を薙ぎ倒しながらネギ君の元に駆け寄る。

「大丈夫かネギ君？」

「は…はい」

「そうか…よかった」

俺はネギ君を安全なところに誘導した。

というのも、これから戦うのはさっきまでとは違う。

四足歩行だった狼は二足歩行となり、筋肉に溢れている。

大きさも3mはあるだろう。

この狼たちのボスであろう。

こいつを倒して、この麻帆良から叩き出す。

俺は刀を構え、巨大狼も戦闘体制は万全だ。
沈黙が流れる。

大狼が動き出す。俺はその動きに合わせて、それを回避する。
筋肉質のせいか攻撃が多少単調である。
これならいける。そう思ったときだった。

「うわあああああつ！」

「ネギー！」

ネギ君が狼の残党に襲われていた。

ネギ君は戦って力が落ちてるし、アスナさんはもう体力の限界だ。
二人を守るのは、もう俺しかない。

俺がネギ君に気を取られていた瞬間だった。

鈍い音が腹部を裂く。

大狼の鋭い爪が俺の腹部を裂いたのだ。

「悠也さんっ！！！」

ネギ君は俺の方を向いて叫んでいる。

俺は自分が倒れるのを感じた。腹部からは血が流れている。やばい
くらいに流れている。

マジどうしよう。死ぬのかここで？

まあ、いいか。大した人生じゃなかったし。そろそろ潮時…

「アスナさん！ 早く逃げて…」
「でも…ネギを置いていけないわよっ！」

ネギ君はすでに魔力が尽きていた。それなのにまだ、アスナさんを守ろうとしている。

なのに俺はどうだ？ 10歳の少年が戦っているのに俺は何だ？
ネギ君が狼に殺される。このままでは確実に。

嫌だ。

嫌だ。

嫌だ。

なぜだか知らないけど、それだけは無償に嫌だ。
助けたい。俺は助けられた。だから助ける。いや、助けなければならぬ。

そうだ。今度は俺がネギ君を守る番だ。
そう思うと、力が湧いてくる。

守りたい。

守る。必ず。

守ってみせる。二人を。

刹那。ネギの目の前の狼は全て消し飛んだ。

さきほどの斬撃ではない。魔術。風の刃が狼を切り裂いた。

悠也は右手を狼に向けている。腹部からの流血は留まる事を知らずに流れ続けている。

悠也は一言で言う魔法剣士である。剣に魔力を加えることも可能。もちろん、魔法も使える。

普通、魔法使いが魔法を詠唱するのには、魔法具が必要だが、悠也のような魔法剣士の場合、自らの魔力を宿した剣を持つことにより詠唱が可能となる。

さらに普通の魔法使いよりも詠唱が早い。その分消耗する体力も多

い。悠也の体力も限界が近かった。

よし。なんとか間に合った。これでネギ君は大丈夫だな。

が、油断も束の間、俺は広報からの殺気を感じ取り振り向いた。

大狼の鋭い爪を辛うじて刀で受け止める。傷口に衝撃が響き、血が溢れてくる。ヤバイ。本当にヤバイ。

ネギ君やアスナさんを助けるので頭がいっぱいで自分の体を考えるのを忘れていた。すでに倒れてもおかしくないほどの出血をしている。

意識すると急激に体がだるくなってきた。

回復しないと…。しかし、詠唱の時間もない。すでに攻撃を受けることでいっぱいだった。

どうすれば…。

「魔法の射手・連弾・光の17矢!!」

後ろから魔力を感じると、ネギ君が「魔法の射手」を大狼に向かって放ってくれた。
今だ。

「トワイヌ・リライズ・アビリオン…」

詠唱を開始する。

―安らぎの流れよ。我に癒しを与えたまえ。―

「流水の光」

水属性の回復魔法だ。

これくらいの深い傷になると、応急処置にしかないが、気休め程度には丁度いい。

用は今動けばいいんだ。そして二人を守る。

大狼は自らを攻撃したネギを見つけると同時に飛び掛ろうと、地面に手を突いた。

しかし、そこに突いたはずの手はなく、代わりに右腕が地面に転がっていた。右腕があつたはずの箇所からは血飛沫が流れている。

大狼は叫んだ。ネギのアスナもその呻き声に身震いをした恐怖すら覚える、そんな声音だった。

だが、悠也は震えない。守る者がいるから。

よし。なんとかいけた。

だが、まだだ。片腕を失ったとはいえ、純粋な力勝負なら圧倒的にこちらが不利だ。

だけど負けない。必ず勝つ。

「衝破絶空剣！」

刀に気を集中させ、一気に凝縮、そして斬撃の瞬間に解き放つ。
決まった。と、思っていた。

刀は大狼の腹部を確かに切り裂くはずだった。しかし、切れない。
俺は弾かれて、体勢を整える。

大狼も本気のような。

その禍々しい魔力を集中し、刀の切断を拒んだ。
だが、まだだ。

だったらこっちも奥の手だ。

力の消費は激しいが、倒すにはそれしかない。

「トワイス・リライス・アビリオン……」

始動キーを唱え、詠唱を開始する。

――炎の象徴がイフリート。その断罪の炎、我が剣に宿せ、紅蓮の焰、
解き放て。――

「断罪の炎！」

刀が一気に業火で燃える。

俺が編み出した技。魔法剣。

特有の魔術を唱えることで刀に属性を持たせることができる。

それを使うと使わないとは、その属性の技の威力も段違いである。しかし、魔力の違いも段違いで、常に精神の消費と戦わなければならない。

けれど、戦う。それが俺の決めたことだから。

大狼は警戒していた。いきなり現れた炎に。

しかし、さすがは魔獣。それでも戦うことをやめないようである。

”戦い”こそが魔獣の本能であるから。

大狼は単調にこちらに向かって走ってくる。

しかし、それがあまりにも威圧的でありにも恐ろしく思えた。

飲まれるな。相手に合わせる。

自らの間合いに入ったときだけ、攻撃を繰り返す。

「斬衝炎空刃！」

さきほどの攻撃に「炎」を加えた技である。

しかし、今度は切れる。大狼の腹部からは血が吹き出ている。

大狼は狂いだした。

我を忘れて暴れだす。危険だ。

このままにしておけばなにをするかわからない。倒す。それだけだ。

大狼は暴れながらも俺への攻撃をやめない。

俺は回避しつつ、攻撃の機会を見逃さない。

ここだ。

「紅皇翔焰陣！」

舞い上がる紅蓮の炎が大狼を確かに捉えた。

魔獣はこの世の物ではない。

元は動物や、その他いろいろな生物の残した魔力、念の宿った魔力が具現化したと、魔法界では言われている。

魔獣は消え去った。

同時に俺の意識も飛んだ。

ネギ君とアスナさんが駆け寄ってくるのが見えた。

ほのかに香る薬品の匂い。

目を覚ますと俺はベッドの中にいた。

白いシートがなんともいえないイメージを醸し出している。そう、ここは保健室だ。

ガラガラとドアが開き、ネギ君とアスナさんが入ってくる。ネギ君は涙目を浮かべながら俺に駆け寄ってくる。

「悠也さん！ 心配したんですよっ！ 丸一日起きなかつたんですから！」

驚いた。俺はどうやら丸一日寝ていたらしい。

まあ当然か。応急処置をしたとはいえ、あれほどの致命傷を受けたのだ。しょうがないだろう。

アスナさんは、目を逸らしながら、俺に話しかけてきた。

「その…一応お礼を言っておくわ。助けてもらったし…」

ほのかに顔を赤めながらお礼を言うアスナさんがまた、いい。

ホントにもっとおとなしかったら完璧に近いのに。

もったいない、ああもったいない、もったいない。

アスナさんは俺の視線に気がついたのか、

「じろじろ見るな！」

とか言つて俺の顔に枕を投げつけた。

調子に乗りすぎたか…。

だけどホントに感謝している。どうやら二人が俺を運んでくれたらしいからな。

ふと、アスナさんが唐突に話しを始めた。

「そつえば…アンタよくあんなのを倒したわね。ネギが強力した

とはいえ…すごいわね」
「本当ですね！」

アスナさんの一言で俺のあの日の記憶が完全に蘇ってきた。

ガタガタガタガタ。

ブルブルブルブル。

ガタブルガタブル。

急にあの日のことが恐ろしくなってきた。
一体なにしてたんだろうな俺は。

アスナさんは血行を変えて俺に話しかける。

「ちょっとアンタ脂汗流れまくっているわよ！」
「だだだだだだ…大丈夫ぶぶぶぶぶ…！」
「全然大丈夫じゃないじゃない！」

その辺りまでしか俺は覚えていない。
その後に目を覚ますと、さらに一晩経っていた。
ネギ君に聞いた所気を失ってブツ倒れたらしい。
情けない俺…。

とりあえず今日も俺は学校を休んだ。

行く気は満々だったのだが、保健室のしずな先生に最初は呼びかけ、最後にはその豊かな上半身の頂を駆使していただき、俺は2秒で先生の命を了解した。

やっぱり俺は情けない人間である。

学園長室。アンティークがところどころに並んでいて、独特の雰囲気
を醸し出している。

「それは本当かの？」

「はい。確かに彼の左肩にありました」

「ふむ…。ごくろうじやった。下がってよい」

「はっ！」

黒フードを被った人物は学園長に情報を伝えると、颯爽とどこかに
消え去った。

「麻帆良学園裏情報部の話じゃ…。間違いあるまい」

学園長は疲れきった独り言を述べ始めた。

「まさか彼が…櫻井悠也君が失われたはずの魔法世界の魔法集団
大罪の代行者”の一人じゃったとは…」

学園長は書類を束ね、ため息をついた。

—< 続く >—

感想はこちらへ！

自らの文章力では説明しきれないのはわかっています。
なので、説明ベタですが、作中のオリジナル技・術の説明をしたい
と思います。

『衝破刃』

気を刀に集めて放つ技。

遠距離まで攻撃が可能だが、その分威力も弱い。
魔法で言うところの単発の「魔法の射手」を刀により発生させたと
思うとわかりやすい…はず。

『翔旋陣』

一定の場所・範囲を指定し、そこに気を集める。
刀の振り上げと同時にその位置に集めた気を上空に放つ技。
範囲が広く多勢有効だが、一体一体に対しても威力は弱く、一撃で
仕留めるのは不可能。

『衝破絶空剣』

刀に気を集中、斬撃にのみ気を高め、斬撃を繰り出す技。
作中四話では斬撃が途中で拒まれたが、本来の斬の威力は岩を軽々
と切り裂く。

対人戦だと、人をも一刀両断しかねないので悠也は対人戦ではこの
技はあまり好んではない。

『斬翔炎空刃』

上記の技に”炎”を加えた技。

”炎”が加わったことにより破壊力が増す。

『紅皇翔焰陣』

”炎”を刀に集めたあと、体に纏い、一気に舞い上がる技。
範囲、威力共に上位で、”炎”を苦手とする者に対しては一撃、も
しくは致命傷を与えられる威力である。

『トワイス・リライス・アビリオン』

魔法剣士、悠也の始動キー。

悠也曰く、考えるのが面倒なのでその場の思いつきでこの指導キー
になった。

『流水の光』

水と光の属性の回復魔法。

水属性は血の流れをも操ることができ、悠也はこれで止血した。

光属性は回復を主とし、傷口の治癒はこれで行った。

『断罪の炎』

悠也特有の属性追加の術。

”炎”は破壊を意味し、それを刀に加えることで刀の切る力、術の威力が上昇する。

悠也が最初に覚えた属性追加の術。

このような術を「追加属術」と呼ぶ。

第五話　吸血鬼の噂

その後、失神より生き返った俺だが、ネギ君、アスナさんの猛反発により、学校の投稿は拒否された。

まだ通い始めて間もないのに…頼むから俺の軽いラブコメ学園ライフを楽しませてくれ。

『麻帆良の軌跡』

いや、待てよ。

よく考えてみる。数日間学園生活を送っているが…一度もそういったハプニング？ いや、ドキリ？ いやいやいやラブコメっぽい展開？

そういうのがないんじゃないかな？

例えば着替えの途中で間違って入って、「きゃっ！」「うっ…ごめん！」

って感じの展開はないのかよ？

いや、それはそれ以上も追求しちゃうけど、まず基本はそれだろ。間違って入室に始まり、間違って入室に終わらないと。基本だろ基本。

とりあえず学校に行こう。
もしかしたら俺の望んだ展開が現れるかもしれないからな。

というわけで俺は今ネギ君のHRを淡々と聞いていた。
教室に入れば、3-Aのみなさんの暖かい出迎えで教室にinしたのはいいんだが、合いも変わらず俺の望んだ展開はやって来なかった。

いやいや、違うぞ俺。そういうのは望んで待つんじゃない。やってくるのを待つんだ。
とはいったものの、やっぱり気になってしまうな。

HRの時間も終わりがけのころ、教室のドアが開き、上半身に核兵器を備えた教員、しずな先生がいらっしやった。

「ネギ先生、今日は生徒たちの身体測定なのでよろしくお願いします」

「あ、はい！　じゃあみなさん服を脱いでください！」

一瞬空気が固まる。

しかし、次の瞬間生徒諸君はにやにやと笑みを浮かべ、

「ネギ先生のエッチー！」

と言い出した。

ピキーン。

俺の眼光が光る。

待っていたぜこういつた展開をよ！

しずな先生はなんといつた？

”生徒たち”の身体測定。”生徒たち”。ここ重要。

俺は？ 生徒。つまり…この身体測定に参加する権利がある。

ついに俺の時代が来たようだ。

すまないな全国のモテない男諸君！

俺は勝ち組の会談を一步踏みしめさせてもらうぜ！

「じゃあ悠也さん。出ますよ」

「え…あ、ちよつ待てよネギ君。ちよつとだけ…ちよつとだけ」

みんなはクスクス笑っていた。

まあ…当然だよな。さらば俺の青春…。

俺はただ眼球にもたまには教養が必要と思っただけなんだ…。

俺が教室の3-Aみなさんのワイワイと可愛い声ではしゃいでいるのを耳にしながら頭を抱え、ブツブツと念仏染みた独り言に没頭していると、泉亜子さんが血相を抱えてこちらに向かって走ってきた。

「大変やー！ まき絵が…まき絵がー！」

「なに！？ 佐々木さんがどうしたって？」

俺が答えると時間差で、

「まき絵がどうしたの!？」

肌の80%くらいを露にし下着姿3-Aのみなさんが窓からドアから現れた。

ネギ君は悲鳴を上げていた。

俺か？ そりゃもう当然の如く…失神でぶっ倒れた。

ああ…これでしばらくは目のほうも安泰だ…。

ちなみにあとで聞いたところ、保健室に俺を運んでくれたのはアスナさんらしい。

目が覚めると保健室だった。

「あ、気がついたようやな」

ちなみに俺とここで看病してくれたのはこのかさん一人だった。

うつ…お気遣いに心が痛む。

他のみんなは全員まき絵さんのところにいる。薄情な人たちだ。

とはいっても、今はまき絵さんのほうが気になるな。

どうせ俺はどうってことないし、とりあえずベッドから起き、まき絵さんの容態を見に行った。

まき絵さんは安らかな寝息を立てて見せ付けるかのようにぐっすり眠っていた。

おい…!

俺はやりきれない怒りでいっぱいだった。

結局まき絵さんは寝ているだけ、というだけで保健室に放置して、みんな授業に戻った。

残ったのは教員のネギ君と、なぜかわからないが俺だった。

さつきから気になってはいたのだが、まき絵さんの様子がおかしいや、様子ではない。どっちかと言うと感である。

なんというか纏っている雰囲気というか…なんというか…とりあえず気にしないことにした。

その日の放課後。

俺は自分の部屋に向かって足を進めていた。

俺の部屋は桜通りを通った先にある。

女子寮からは割と近場なのだが、なぜか桜通りを通らないといけない。

最近桜通りは嫌な噂が流れているんだよな…。

嫌だなおい…。……。

怖くないー♪ 怖くないー♪ きつと怖くないー♪

頭のネジが恐怖で外れてしまった俺は唐突に歌いだした。

こういうときは歌うのが一番だ。恥ずかしくて声にはだせないが…。

と、どこからか俺が歌った歌詞と似ている歌が聞こえてきた。
このおっとりとした声色。

宮崎のどかさんだ。なぜここを通っているのだろう？

桜通りを通っても女子寮には続いてないはずだが。

のどかさんも怖いのか？

歌を歌いながら桜通りを歩いている。

よーし…お互い怖い者同士、仲良く帰ろうではないか。

と、俺がけっこう後ろから歩いて来るのどかさんに駆け寄ろうとした直後。

ドクン！

心臓の鼓動が急激に早くなる。

どこからか感じるこの”嫌”な感じ。

理由も述べられないくらいにとてつもなく”嫌”な感じだった。

この感じは魔力。しかも相当な邪気と一緒に。

魔力の量自体は対したことないが、その魔力の禍々しさは先日戦った魔獣とは比べ物にならない。

その魔力の正体は気配もなく現れた。

街灯の一つの上に立っている。

その正体はゆっくりと、澄ました声で喋りだした。

「出席番号27番、宮崎のとかだな。その血を少し分けさせてもら
うぞ」

血。血を欲している。

つまりは吸血鬼だろう。

思い出した。

昔、魔法世界にいたころ。誰かからこんな噂を聞いたことがある。数年前からさっぱりと姿を消した吸血鬼がいる。その吸血鬼は麻帆良学園と言うところで姿を消したと聞いた。と。

俺が知る中で思い当たる吸血鬼は一人。

エヴァンジェリン・A・K？マクダウエル。

『闇の福音』の二つ名を持つ魔法使いだ。

エヴァはのどさんに近寄る。のどさんはすでに気を失っていた。

「フン…。もう気を失ったか。まあいい。とりあえず血をもらっぞ」

そう言つてエヴァはのどさんの首元に齒を近づける。

何をしている俺。

クラスメイトが傷つけられそうなんだぞ。

ビビっている場合か。まあ確かに怖いが。

動け…。動けー！

エヴァの齒がのどさんの首に当てられた。血がわずかだが溢れた。

ドクン！

気がついたら、もう切りかかっていた。

「な！ 貴様は！？」

エヴァはいきなりの攻撃に驚き身を引く。

「やかましい。クラスメイトが傷つけられてイライラしてんだよ俺は」

まただ。

また守りたいと思ったから力が湧いてきた。
一体何なんだ？

相変わらず怖い。けど、体が動く。
いいような悪いような力だ。

「貴様は…。！？ まさか…貴様！」

「なんだ？」

「いやいい…気のせいだ」

何を言っているんだこいつは？

どうでもいい。とりあえずのどかさから退いたようだ。
やはり戦わなければいけないようだな。

俺は構える。向こうもやる気だ。

しかし、多少空気が読めなかった第三者が登場した。

「魔法の射手・戒めの風矢！」

風の魔法の射手が飛んでくる。

どうやらネギ君のようだ。後ろからアスナさんとこのかさんもいる。
エヴァは懷から触媒を取り出す。

「ふん。氷盾」

触媒を投げつけた。

すると氷の盾が現れてエヴァと魔法の射手との衝突は免れた。
するとネギ君はエヴァに気づく。

「あなたは同じクラスの…エヴァンジェリンさん!？」

気づくの遅いよ。

つーか俺無視されてない？

第六話　通り魔の正体

沈黙だけが流れている。

ネギ君は驚いた顔でじつとエヴァを見ていた。

俺はいち早くネギ君の元に駆け寄る。

エヴァは余裕の表情で俺たちを見ていた。

『麻帆良の軌跡』

エヴァは指先から流れている血を舐めた。

触媒による氷の盾を発生させたはよいが、ネギ君の魔力が高く、盾でも防ぎきれなかった。

「10歳にしてこの力…さすがは奴の息子だけはある」

「!？」

ネギは驚きの表情を隠せない。

まあ知らないのも無理はないだろう。

サウザンドマスターは過去にこのエヴァと戦っている。勝敗は知らない。戦っているということだけしか知らないのだ。

だが、なぜエヴァがこの学校にいるのかはわからない。

『闇の福音』の二つ名を持つ強大な魔力の持ち主だ。仮に呪いを掛けられたとしても、エヴァの魔力なら軽々と解けるはずだ。いや、違う。

今のエヴァは魔力こそ強力だが、その量が少ない。魔力の量だけならネギ君並、いや、それ以下である。

なぜだろう…。自ら隠しているのだろうか？

いや、それでは意味がない。

仮に。仮にだ。もし、魔力が”使えない”ようにされていたらどうだろう？

そしてそれをできる人間は誰だろう？

答えは簡単だ。

俺はサウザンドマスターを思い浮かべ、わずかに笑みを浮かべた。

エヴァは触媒を構える。

なるほど。魔力が少ない分は触媒でカバーか

見ると、マントの中にはけっこうな触媒が備えられていた。

エヴァは触媒を投げ、呪文を唱える。

「氷結・武装解除！」

「うわあ！？」

「ぐっ…！」

「氷結・武装解除」は冷氣となってこちらに向かってくる。

そして俺ら触れると氷となって散っていく。

とっさに抵抗^{レジスト}したが、魔力は少なくとも技術が半端ない。

高い魔力でレジストしても、そのわずかなレジストの間に武装解除を叩き込む。

俺やネギ君の魔力をもつてしても完全には防ぎきれない。ネギ君は肩の部分が、俺も肩の部分の服が氷となつて散つていった。俺が抱えていたのどかさんだが、自らのレジストに気が完全に回っていて、のどかさんにレジストを掛けるのをすっかり忘れていた。

まあ、武装解除は基本的殺傷能力はないのだが。強いて言うならば武装が解かれると……服が脱げる……だ。

生まれたままに近い姿をしているのどかさんは胸こそ幼いが女性らしいラインを保っていた。

まあ……なんだ……。

ものすごく可愛い。こんなときに余裕でいられないのだが……ものすごく眩しい。

純情に近い俺は当然その光景を目に焼き付けた後、気を失った。

「……なんなんだ先生、そいつは？」

「ぼ……僕の生徒ですよ。アナタと同じクラスの……」

二人の最後に聞いた言葉がそれだった。

俺が目を覚めたのはアスナさんのこんな一言だった。

「アンタ本屋ちゃんになんてことしてんのよっ!」

ものすごい鈍い音と共に俺はたたき起こされた。
本屋ちゃん?

ああ、のどかさんのことね。

確か図書委員だから…。あー…それでね。

なんて悠長にそんな考えに浸っている余裕はなかった。
俺は後頭部から襲ってくる猛烈な痛みと格闘しながら、アスナさんに事情を説明する。

「ち…違うんだ…。もう来て見たらこうなっていたって言うか…」
「へえ」

通じそうもない。

しかし俺はめげずにいい訳を繰り出す。

「そうだ! 俺はここで倒れていたのどかさんを助けたんだ!」
「悠也君…。そんな人やったんやね…」

ああ…このかさんまでそちら側に着きますか。
ネギ君もいないし、同情を求める人がいない。
あれ?

そういえばネギ君はどこにいった？

辺りをきよるきよる見回すとネギ君はおるか、エヴァの姿もない。

「アスナさん。ネギ君どこにいった？」

「え？ 確か向こうに」

アスナさんはそう言って桜通りの途中の外れ道を指差す。

「何か言っ てなかったか？」

「私たちがここに来たときはいたわ。本屋ちゃんがなんでこんなになつてゐるのか、って聞いたら夕悠也に聞けばわかるって…」

……。

あの野郎…。

とつさに俺に罪を擦り付けやがった。

おかげで見る。俺は誤解を招いてしまったじゃないか。

…。

つてことは…ネギ君はまさか、エヴァを追いかけたのでは？

そうに違いない。よし、俺も追うか。

「すまんアスナさん。俺、ネギ君を追う」

「ちよつと待ちなさいよ！ まだ本屋ちゃんがこうなっている理由を…」

俺はしぶしぶ答えた。

このかさんには聞こえない声でだ。

「吸血鬼の正体がわかったかもしれないんだ。とりあえずそいつを追いかけて確かめてみる」

それだけ言って俺は駆け出した。

普通に走っても追いつけないのは目に見えているので、「加速」の呪文を掛けた。

「私も追ってみるわ」

「わかったえ。気をつけてな」

アスナさんが追ってきたとは思ってもよらなかった。

「待てー！ー！ー！」

ネギは猛スピードでエヴァを追いかける。
エヴァは余裕の表情でそれを見つめている。
その後ろから悠也が走ってきた。

「待てーーーー!!」

やっと思いついた…。

二人ともどういうスピードしてるんだよ。

とりあえずはあのエヴァに攻撃を不付けることが先決だろう。
俺は詠唱を開始しようとした。

ドクン…。

「!?!」

俺は肩膝を付く。

なんだ? 急に魔力が途切れた。

さっきまでなんとも無かったのに体が震え始めた。

怖い。

さっきまではこんな感情はなかったのに。
けど今ははつきりとある。

怖い。

なぜだ。

さっきまでは勇気百倍って乗りができるくらいだったのに。
のどかさんを守ろうとがんばって…。あ。

そうだ。のどかさんだ。

もうのどかさんは無事だ。

今回俺はのどかさんを守りたいと思ったから力が湧いてきた。
しかし、のどかさんは一応安全は確保できてる。つまり”守れた”
のだ。

そう思ったら急に力が抜け出して、恐怖が再び生まれてきた。
くそ、なんなんだ俺は。

目の前の人間が傷つかなきゃ力が出ないのか。

そんなときにネギ君がエヴァの反撃で傷つく。

ドクン…。

来た。

本当に俺は、大事な人が傷つかないと力が発揮できないようだ。
悔しい。

そんな自分が猛烈に腹立たしかった。

その怒りを胸に俺は呪文を詠唱する。

「魔法の射手・連弾・雷の七矢！」

七本の雷の矢が俺の周囲に発生、一気にエヴァに向かって放たれる。
しかし、エヴァはそれを避け、飛び立った。

「杖もなしに飛んだ！？ やっぱりただの魔法使いじゃないぞ…！」

ネギ君はそう分析すると、杖に跨りエヴァの後を追った。
俺はと言えば、風系統の魔法で空気の壁を周囲に発生させ、浮かせ

る。それで移動した。

余談ではあるが俺の得意な魔法系統は雷、風である。その他の属性はできるがあまり得意ではない。

ネギ君は必死になってエヴァを追いかける。

『闇の福音』であるエヴァはバンパイアで、きっとあのマントのその力の一種だろう。ちなみにネギ君は知っていない。

「待ちなさい！ 教師として許しませんよー！」

そう言って待つバカではないと思うが。

「ははっ！ 先生、奴のことが知りたいか？ 私を捕まえたら教えてやろう！」

エヴァは余裕の笑みでネギ君を挑発する。

「！ 本当ですね？」

ネギ君の周囲の魔力が高まる。
戦いの始まりである。

第七話　魔法使いの従者（ミニステル・マギ）

ネギ君は杖の上で詠唱を始めている。

俺も詠唱して参戦したいのだが、風の『浮遊』魔法を自己に使っているため、詠唱に集中したら『浮遊』が途切れて落っこちそうだし…。

『麻帆良の軌跡』

ネギ君は詠唱を完成させる。

魔力の感じからして風系統なのがわかる。

ネギ君は呪文を唱える。

『風精召喚・剣を執る戦友！』

ネギ君の周りに8体のネギ君そっくりの武器を持った精霊が現れた。

「分身！？ いや…精霊召喚か…」

エヴァもそれには驚いていた。

無理もない。

この精霊召喚の魔法はかなりの魔力コントロールを必要とする。

大人でも召喚には手を焼くぐらいだ。

ちなみに俺はこの精霊召喚系統が攻撃呪文中で一番とも言えるほどに苦手で、成功した試しがない。多少憎らしい…。

8体の精霊はエヴァに向かって総攻撃を仕掛けた。

エヴァも負けじと触媒を放り、精霊たちを撃退している。

…。今気がついたんだが、俺必要なくない？

エヴァもネギ君の攻撃でけっこう苦戦している。

いやいやいや。

必要だよな、俺。

誰かそう言ってくれ、マジで。

「ククッ！ とても10歳の見習いとは思えないな！」

そう言つてエヴァは俺とネギ君に触媒を投げつける。

あ、やべ。

予想通りの爆発音と共に触媒が破裂する。

爆風に巻き込まれた俺は辛うじて体制を整えた。

が、今ので『浮遊』の集中が完全に切れたらしい。

俺は気がついたら落下していた。

ネギ君も同じく落下している。
どうやら杖から落ちたようだ。
ふーむ…。まずいな非常に。
見たところネギ君は杖がないと魔法は使えないようだし…ここは俺
がやるしかないようだ。

「トワイヌ・リライヌ・アビリオン…」

―風の象徴がシルフィード。その断罪の暴風、我が剣に宿せ、真空
の嵐、吹き荒れろ―

『断罪の風!』

剣を”召喚”し、術により風を加える。

精霊召喚系統を不得意とする俺だが、代わりに違う精霊関係の系統
術がある。

精霊の力を借りた精霊術。

精霊術により強化された剣が魔法剣だ。

”風”系統の強化は”炎”系統の術より威力は劣るが風を使った自
在な技がある。

「空翔斬!」

ネギ君に当たらないように。

真空を剣に凝固、一気に切り上げることによって風を発生させる。術で助けてもよかったのだが、詠唱が少々面倒なので妥協した。とりあえずは足元にあった屋根に着地した。

俺もネギ君も無事のようだ。

エヴァもゆっくりと降りてくる。

しかも余裕な表情で。

少々ム力つくな。考えるより先に詠唱のが早かった。

『トワイス・リリース・アビリオン…魔法の射手・連弾・風の9矢
』！』

エヴァも予想していなかったようだ。

意表突かれ回避が遅れる。

それを見計らったネギ君がすぐさま呪文を唱えた。

『風花・武装解除！』

先ほどエヴァが俺たちに向かって放った”武装解除”の風系統の魔法である。

エヴァの武装解除か…。すごかったな…。

のどかさんの裸が…。は！ やばい、やばい！ 鼻血が…。

武装解除はエヴァに命中した。

エヴァの羽織っていたマントは蝙蝠となってどこかに飛んでいった。肝心のエヴァ本人は…可愛らしい下着姿になっていた。

ま…眩しい。光沢でてる。光沢。
ロリコンだったら一撃で沈むであろうその光景で俺は一瞬気を失い
そうになっていた。
気を失いそうになったが、なんとか俺は意識を取り留めた。
下着姿のエヴァは平然とした顔で立っている。
もう少し恥ずかしがってくれ。
こっちが無駄に意識してしまう。

「さあ、先生。得意な魔法を唱えるがいい」

一瞬躊躇いを見せるが、ネギ君は呪文の詠唱を始める。
風系統の捕縛魔法、『戒めの風矢』の詠唱をしている。
エヴァは一向に詠唱阻もうとはしない。
それどころか悠然と立っているのである。
そんなのではネギ君の魔法で一撃だぞ。
詠唱し終わったネギ君は術の発動をする、寸前だった。

「魔法の射手…あでっ！」

ネギ君は術の発動を止め、額をさすり出した。
デコピンである。

なんかもう、ものすごい痛そうな音のデコピンがネギ君の額に叩き
込まれたのであった。

油断していたとは言え、あまりのスピードに一瞬見失ったが、その
姿はすぐに捉えることができた。

”そいつ”はエヴァのすぐ横に現れたからだ。

出席番号10番、絡操茶々丸だ。

「紹介しよう。魔法使いの従者絡操^{ミニステル・マギ}茶々丸だ」

「茶々丸さんっ!？」

知ってます。

茶々丸は一礼した。敵とは言え、礼儀正しい奴である。

とはいったものの、一人が二人に増えただけだ。

結局これで同等の戦いができると言うものである。

面子からして俺は茶々丸とか。

以前葉加瀬さんから聞いたのだが、茶々丸は自分が作ったロボットだといっていた。

随分と手の込んだロボを作ったものだ。

どういう原理で動いてるんだあれ？

と、そんな余裕でいられるのも、茶々丸の放つ攻撃的本能を感じとるまでで、茶々丸は気づけば一気に俺とも間合いを詰めて、拳を放っていた。

ロボのせいだろうか。

常人の拳とは比べ物にならないほどの威力だ。

とっさに俺と茶々丸の拳とも間に刀を出さなかったら肋骨は確実に折れてただろう。

距離を置き、自分の間合いに入るように茶々丸との距離を一気に詰めた。

「空破斬衝！」

風の精霊術により強化されたかぜ系統の魔法剣だ。

風を刀に纏い、突きを放つと同時に真空の風を放つ技である。

突然の攻撃にも茶々丸は何とかガードする。

どいう反射神経をしているんだ。このタイプの相手にはまず、詠唱する時間をくれない。

ということは、だ。刀術だけで戦わなければならないようだ。

しょうがないと思いつながら、俺は再び刀を構え、切りかかろうとした。

しかし、茶々丸は構えを解いていた。

一体何を考えているのかと思いつながら、攻撃に専念しようとした。エヴァの不適な笑みが一瞬目に入った。

「うおっ！？」

視界が暗くなつたのがわかった。

「悠也さん！？」

ネギ君叫び声が聞こえた。

俺の視界を遮つた”もの”。

無数の小型人形だった。

油断していたのだろう。

エヴァの異名は『闇の福音』だけではなかった。
『人形使い』の異名もあった。

エヴァはその術で人形を操っていたのだろう。

俺は身動きが取れなくなる。

何かが刺さった気がした。

気が遠くなる。

視界がさらに暗くなる。

ネギ君がこちらを向いて叫んでいるのが聞こえる。

エヴァが不快な笑みをこちらに向けて浮かべているのが見える。

意識が完全に途切れた。

気がついたら保健室だった。

薬品の匂いが鼻に残る。

左腕に針で刺されたような痛みがわずかに残っていた。
傍にはアスナさんとこのかさんが座っていた。

「大丈夫？ 悠也君桜通りで倒れてた言うやん」

は？

俺は確か屋上で…。

「お大事にな。ほな」

このかさんは愛想よく手を振って保健室を出て行った。

「…アスナさん。ネギは？」

「部屋で寝てる。なんか泣き疲れたみたいね」

と、アスナさんは笑った。

「エヴァは？」

「あ、エヴァちゃん？　なんかネギをいじめてたから飛び蹴り食らわしたらどっかいっちゃった」

と、アスナさんは照れ笑いを浮かべていた。

よほどネギ君を助けたのが誇らしかったのだろう。

というか、一般人のアスナさんが、魔力は少ないとはいえ『闇の福音』の障壁を突き破り、蹴りを食らわしたのか。

本当に一般人なのかアスナさんは？

「とりあえず、今日はもう寝たら？　アンタも色々あったみたいだし」

「ああ、そうする」

「じゃあ、お大事にね」

「ああ…」

アスナさんも愛想よく手を振って出て行った。

俺はもはや元気よく返事する元気もない。

情けない。

一般人のアスナさんが助けて、魔法剣士である俺が助けられた。

悔しい。

もはや情けないを通り越して悔しい。
自分の守りたいはこの程度なのか。
そう思うと無償に落ち込んでくる。

何が守りたいだ。

何が守りたいと思うと力が湧くだ。

目の前の人すら守れていないじゃないか。

明日ネギ君に謝ろう。
守れなくてごめんって。

そして…もっと強くなるう。
次にエヴァと戦う時は守れるように。

第八話　～仮契約カード～

翌日、俺は朝遅くに目を覚ました。
幸いにも今日は土曜日で、学校は休みである。
俺は保健室のベッドから起き上がる。
そのときはまだ油断をしていたのだった。

『麻帆良の軌跡』

ベッドから起きた俺を待ち受けていたのは3 - Aのみなさんだった。

どうも様子がおかしいなと思ってよくよく見てみると…みなさんナース服に身を包んでいらつしやる。
美しい。

というかもう、あれだ。光沢出ているよ光沢。拝んでおこつ。
じゃ、なくて。

とりあえず現実に戻ろう。
なぜみんながナース服を着てここににいるのかを。

「悠也くんの看病に来たんやえ」

と、このかさんが満面の笑みで答えてくれた。

話を聞いていくと、どうやらみなさんこの土曜日の休日の暇の潰し方を探していたらしい。が、それも見つからず、俺の看病をして暇を潰そうと考えたらしい。

暇潰し程度の人間ですか？ 俺は。

よく見るとアスナさんとネギ君がいない。

アスナさんはこんなことに興味はないと思うが、ネギ君は美沙さんやハルナさんや裕奈さん辺りに無理矢理ナース服を着せられそうだが。

「アスナさんとネギ君は」

唐突に俺は質問してみた。

このかさんが苦笑いを浮かべながら答えてくれた。

「実はネギ君、今日朝から全然ベッドから出ようとせんのだよ。で、

アスナが起こそうとしとるんやけど…」

「駄目なんですか？」

「そうなんよ。ネギ君全然起きんのんよ」

どうやら昨日のがよほど怖かったようだ。

無理もない。天才子供魔法先生とはいえ、「子供」だ。

「闇の福音」とも歌われる魔法使いエヴァンジェリンと対峙したのだ。怖くないほうがおかしいだろう。

実際に俺のあ後は恐怖で意識が吹っ飛んだくらいだからな。

話の経緯を聞くからに、どうやらこのかさんは俺にネギ君を起こしにいつてもらいたいようだ。

まあ、日頃世話になっているし、これは断る道理がない。行くしよう。

「とりあえず、部屋に行ってみますか…」

俺は重たい腰を上げ、保健室を出て行った。傷はほとんど無いに等しいので関係ない。

一つ心残りと言えば…3-Aの新手の花園をもっと目に焼き付けられなかったことかな。

部屋に行くと、ネギ君の呻き声がよく聞こえた。
アスナさんの罵声の耳に響く。重症だ。これでは週明けの学校、ど
うするのだろうか。
とりあえず声を掛けてみた。

「あの…アスナさん」

「あ、悠也。丁度よかった。こいつどうにかしてやって！」

どうにかしろと言われても…。

見たところネギ君はテコでも動きそうにない。
ガタガタと震えながら布団に包まっている。

さて…どうしたものか…。

とりあえず物で釣ってみよう。

「ネギ君…これ新作のお菓子なんだけど…」
「……………」

無視された。

その後も色々な手で責めてみたのだが、全部駄目だった。どうやら俺の手に負えるようではないな。

「というわけでとりあえず頼みますアスナさん。また週明けに来ますんで」

俺は、じゃあ、と手を挙げ、すぐさま逃げ去った。

週明けー。

通学路を一人寂しくとぼとぼ歩いているとネギ君の悲鳴のような悲鳴が聞こえた。

見るとネギ君はアスナさんに抱えられ登校させられていた。

さすがに恥ずかしいのだろう。顔が真っ赤である。

とりあえず俺はネギ君を抱えているアスナさんと傍にいたこのかさんのところに寄っていった。

「あ、悠也君、おはよう」

俺に気づいたこのかさんが愛想よくあいさつしてくれた。

天使のような女神のようなその微笑は俺の心を癒してくれます。

俺は、おはよう…、間抜けな声を出しながら答えた。

続いて俺に気づいたアスナさんだが、この無愛想大魔王、おはよ…、とだけ答えてネギ君を抱えて校舎に走っていきやがった。そんなにネギ君が大事か。

いや確かにわかるがもう少し愛想よく答えてくれよ。悲しくなるから。

俺はそんなアスナさんを見守りながら教室に向かっていった。

その日の放課後…。

教室にはクラスの三分の二が残っていた。

首脳にハルナさん、裕奈さん、美沙さんも桜子さん进行かえ、3 -

A 首脳会議が行われていた。

ちなみに俺のポジションニングを特別ゲストという形である。嬉しいような悲しいような…。

まず、ハルナさんが口を開いた。

「えー… 私たち3 - Aはこのたび危機を迎えています」

何の危機だ。

次に裕奈さんが。

「我々のマスコットにて担任のネギ先生に最近元気がない」

いつマスコットになったんだ。

つか普通担任を最初に言うだろ。

次に桜子さんが。

「そこで我々は今回一つの手を打つことにした」

普段のテンションには似合わない若干シリアスな口調で桜子さんが言う。

最後に美沙さんが。

「そこで我々は『ドキッ！ 水着だらけの女子大浴場！ 子供先生の元氣を取り戻せ！』を発令しまーす！」

「えええええっ！？」

一気にクラスにテンションが戻ってきた。

驚きを1%も隠せていない俺は上記のような声を上げた。

話を聞くと、どうやら元気のないネギ君に元気を与えようという事で、秘密裏にネギ君を拘束、大浴場に放り投げ、そこで水着を着た3-Aのみなさんと遊んだりして元気を取り戻そうとのことだ。

ちよつと待てよ。そこになぜ俺が呼ばれる？

いや確かに嬉しいよ。実際歓喜極まりないもの。

それよりの今はこの不安から開放してくれないかな。

「そこで悠也君にお願いなんやけど…」

なんでしょうこのかさん。

アナタのお願いなら謹んで承りますよ。

「リハーサルって大事だよな？」

と、まき絵さんが横から。

リハーサル。つまり俺にリハーサルをしてくれと。

ホワイ、なぜ？

一体なんのリハーサルに？

その疑問には再びこのかさんが口を開いてくれた。

「水着だらけの大浴場のリハーサルや」

その後もことはまるで覚えていないのは不幸中の幸いかもしれない

ネギ君の部屋にて。

気絶したらしい俺はネギ君の部屋に運ばれていた。

まるであの時のことを覚えていない。

思い出そうとすると頭が痛くなる。

確かこのかさんが「水着だらけの大浴場のリハーサルや」って言ったのは覚えていて…その後大浴場に運ばれて…それから……駄目だ。マジで思いだせない。

というか本能的に思い出したくない。

俺が頭痛と苦悩と戦っていると、ぐったりとしたネギ君とアスナさんが入ってきた。ネギ君の手にはなにやら動物が抱えられている。

「なんだ…その小汚い小動物は？」

と聞いてみた。

その答えは意外なところから帰ってきた。

「誰が小汚いでい！」

……。

「あれ…俺疲れてるのかな…？ このおこじよが喋った気が…」
「無視すんなあ！」

「おわっ！ お…おこじよが喋った！？」

魔法世界にいたら、喋る動物もいるにはいるが…まさかおこじよまでとは…。

つーかなぜにおこじよ？

なぜネギ君は大事そうにそのおこじよを机におろしてるの？

「お友達の力モ君です。わざわざ僕のとこまでやってきてくれたんですよ」

「へえ…」

動物が友達つてのもどうかと思うぞ。

んなわけで…その力モ君とやらの話を聞いてみることにした。どうやら力モはネギ君に恩返しがしたいらしく…わざわざやってきたらしい。

おこじよになにができるのかとは思うが…。

「ところで兄貴。全然進んでないみたいですね」

「え？ 何が？」

「パートナー探しですよ。パートナー探し！」

「え…あ、うん。これから探すとこ…」

パートナー。即ち、仮契約することで得ることができる人間のことだ。

立派な魔法使い（マギステル・マギ）になるにはこのパートナーが必須らしく…以前戦った工絡操茶々丸もエヴァのパートナーである。どうやら力モはネギ君にパートナーを付けたいらしい。

興味が無くなつて来た俺は部屋を後にした。

さらに翌日。

放課後の職員室。

俺は何処かに行ってしまったネギ君の代わりに書類を取りに行っていた。

授業中は確かに教室にいたんだが…。

授業が終わるとカモと一緒に何処かに行ってしまった。

そつえばのどかさんも同じくらいにいなくなっただな…。大丈夫だろうか。

まあ…その後になぜかは知らないがアスナさんも行ったみたいだし…大丈夫か。

というかそもそもなぜ俺が書類を取りに来ねばならん。普通はいいんちよとかだろ。

というのも、俺が教室で帰ろうと準備をしていたら、3年の学年主任の未森先生みもりがお呼びになったからだ。

未森先生は若く美人で、スタイルもしずな先生といい勝負だ。

正直言くと男子なら食いつくであろう美人である。

ハゲの先生に頼まれたら絶対断るが、未森先生に頼まれたら断るわけにはいかない。

男性的欲望がマックスになってしまつ自分が情けなく思いながらも俺は付いていった。

職員室に入り身森先生に机までやってくる。

「じゃあこれ…明日ネギ先生にお渡しできるかしら？」

相変わらずこの人はとても喋り方が丁寧である。
自然と自分の声色も優しくなってくる。

「いや…部屋まで届けますよ。割りと近いんで」

「そう？　じゃあ…お願いね」

「はい」

俺は書類を受け取り職員室を後にした。

そういえば…未森先生の視線がずっと俺の左肩辺りを見ていた気が…。

左肩といえば…よくわからないアザみたいなのが昔からあるんだよね…。いつになってもなくならなくて…。とりあえずは気にしていないが。

「クスッ…」

その後。

書類を届けにいくとアスナさんがカモをいじめていた。
理由を聞くとカモが色々と悪さをしたらしい…。

第九話　夜が始まって

目が覚めると体とベットの間に何かが挟まれている気がした。普段上を向いて寝る俺だが、いつも寝返りを打って朝、目が覚めたらいつもうつ伏せで寝ているのである。

体とベットの間に何か挟まれている気がした俺はのっそりと体を起こした。

すると、ぺちゃんこになったカモが虫の息となっていた。

「ああ…兄さん。お早うございます…」

誰が”兄さん”だ。

ついさっき本当にカモが危なそうだったので、すぐさま抱えて、とりあえず干物みただったので、お湯を掛けてやった。

『麻帆良の軌跡』

お湯を掛けてやるととりあえず蘇ったみたいなカモは、俺のベットに入った理由を話し出した。
フムフム。

話を聞くと、どうやら昨日、アスナさんの虐待が有頂天に昇ったらしく（カモ視点）避難した方がいいが避難場所が見つからず、俺の部屋まで辿り着いたらしい。なんとも迷惑な話だ。

とりあえず、学校に向かおうとする俺なのだが、カモが呼び止める。どうやら俺にお礼をしたいらしい。

掃除して恩を返すと言うのだが、一向に部屋は散らかっていくだけである。

腹が立った俺はカモにトゥーキックを食らわし、学校に向かった。

すっかり学園生活にも慣れてしまい、気が付けばもう放課後だった。放課後の麻帆良市内、一人でブラブラしていると、何やら学生たちの人だかりができていた。

気になって近寄ってみると、ろうそくが売られていた。
なぜにろうそく？

と、疑問に思っていると、たまたま傍にいたハルナさん、夕映さんのどかさんが答えてくれた。

「8時から全校一斉停電だよ。聞いてなかったの？」

と、ハルナさんが。

フム。そういえば朝のHRでネギ君が言ってたような…。意識がほとんど飛んでたからよく覚えていなかったな。

「それで停電したときの為に皆ろうそくを買っているのです」

と夕映さんが。

そう言つてのどかさんが持っている、若干多量のろうそくを指してくれた。

「悠也君も…ろうそくを買いに来たんですか？」

と、のどかさんが。

そんな声で言わないでくださいのどかさ。
俺、テンションが上がってしまいますから、マジで。

「まあ…一応…」

当初は予定になかったが、まあいいだろう。

停電してからの明かりがパソコンのディスプレイだけじゃ心許ないからな。

すると、ひょこひょこネギ君、アスナさん、このかさんがやってきた。

ネギ君の肩にはカモが乗っている。いまだにビクビクしながらアスナさんを見ていた。

「あれ？ 悠也もろうそく買いに来たんだ？」

「奇遇やね〜」

ろうそくを買うという目的はこの状態じゃあ誰しも一緒だと思うが、まあ突っ込むまい。

このかさんはイソイソとろうそくを買おうと列に並ぶ。

そんな姿のこのかさんも…可憐だ。

ハ！ イカンイカン。涎が…。

「アスナの分のろうそくいるかえ？」

「私その時間には寝てるからいいわ」

「了解や」

と、このかさんは俺の視線に気づかず、アスナさんに笑顔を向けている。

その笑顔をミクロ単位でいいから俺に向けてくれないだろうか。ま、無理な願いか。

と、ネギ君は一同の輪から離れる。

「じゃあ僕は見回りがありますんで」

「がんばんなー」

教師とは大変なものだ。

夜の見回りがあるらしい。ネギ君は再び女子中等部校舎に向かって歩いていった。

さてと…俺も帰るか。

いつまでもここにいてもしかたがないしな。

俺はお約束の桜通りを通って自分の部屋に向かった。

異変に気がついたのは、停電が始まってすぐのことだった。

携帯を見てみると、もうすぐ8時になりそうだった。

もうすぐ停電か…。

生まれてこの方停電というものはあまり遭遇していないからな。というか暗いのは基本的に怖いので、停電したらすぐに眠っていたというわけで、今回も停電したら即行寝ようと思い、すでにベットで待機していた。

目を瞑るとすぐに電気が消えた。

俺の部屋はけっこう高いところにあり、見渡しがいい。

高いところは割りと好きで、ノートパソコンを弄りながら夜景を眺めるのが好きだった。

だけど、今はその好きだった夜景は何処にもない。

見渡す限りの闇。

闇が空を被い、地を被っていた。

いつも見渡す位置から見る夜の麻帆良は一言で言うといい。心が躍る。いつまでも眺めていたくなる。

けど今は違う。嫌だ。心が拒否反応を起こす。すぐにでも目を逸らしたい。

怖い。

嫌だ。

そんな感情しか、今の麻帆良の夜景には湧いてこない。
俺はベットに潜り込んだ。
早く寝よう。この闇から早く逃れよう。
その思つて眠りにつこうとした瞬間だった――

妙な感覚が体を駆け巡った。

この感じは魔力。しかも、嫌な魔力。

停電するまではなかった強大な魔力が今は麻帆良を飛び交っている。
それに今まで感じたことのない感じの魔力も。

果然に魔力には侵食されず、一般人の感じが残っている。
まさかとは思うが、一般人になんらかの形で魔力が植えつけられた

のかもしれない。

大浴場のほうからだ。

どうする？

行くか…行かぬべきか…。

けど怖いしなあ…。

だけど…もし一般人もなんらかの形で巻き込まれていたら…。

ええい！ くそ！

俺は重たい腰を上げ大浴場に向かった。

大浴場に着くと、案の定、俺の予感が当たってしまった。

「…っ！」

見ると、亜子さんとアキラさんが倒れていた。

いや、正確には眠っているか。

二人からはかすかだが、魔力を感じる。

クソ。なんてこった。俺がもう少し早く来ていたら…。

二人はなぜか生まれたままの姿をしていたが、今はそんなことを気にしている余裕はない。

二人を安全な場所に運ぶ。

運び終わったのと同時に後ろからの奇襲を避けることとなった。

「なっ…!？」

見ると、裕奈さんとまき絵さんだった。

二人からもかすかに魔力を感じる。

二人の行動を見るからに操られている。

誰がやったかは知らないが…とつと二人を催眠から解放してやらないと…。

俺は当身で気絶させようと試みる。

が、操られているせいか、二人の運動神経が滅茶苦茶いい。

二人だと捕らえきれない。

「くそ…!」

やるしかないのか。

俺は刀を”召喚”する。

二人が迫ってくる。

俺はゆっくりと刀を構え、弱めの技を使う。

「昇破刃!」

二人には当てず、二人との距離を置く為に使用した。
予定通り、二人は俺と距離を置く。

あとは一気に距離を詰め、刀の柄で腹部を突く。
気絶した二人はぐったりと腕に寄りかかった。

「よし…これで一安心だ」

俺は亜子さんとアキラさんを寝かせている場所に二人を置いた。
とりあえず…魔力の感じは大体わかった。

魔力の主はわからないが、その魔力を辿って探すのは可能だ。

俺は大浴場を出た。

そして俺を待ち受けていたのは…あの時の人形だった。
しかも大量の。

「…邪魔なんだよ!!」

俺は怒りに任せ、人形の群れに切りかかった。

第十話　闇夜の吸血鬼

息をかなり乱しながら、俺はエヴァが操ったのであろう人形たちを全部倒し終えた。

かなり体力が消耗した。

くそ！ エヴァは最初からこれが狙いだったのか！

俺は失った体力を振り絞り、エヴァから発せられる魔力を辿っていた。

『麻帆良の軌跡』

闇とは…ここまで人に恐怖を齎すものだったのか。

エヴァから発せられる魔力を辿り、街道を重たい足取りで走っていた。

ふと、足が止まる。

周りを見渡しても、闇。闇。闇。

停電した麻帆良学園を覆う闇。

そして、その闇の中で生きているエヴァンジェリン。

なぜそこまで平気なんだ。

なぜそこまで闇に溶け込めるんだ。

ただ、その中に立っているだけで、恐怖で締め付けられそうになる。
闇。

俺は闇が嫌いだ。

守るべきものが…もし闇に飲まれそうになったら、俺は果たして助けられるだろうか。

守りたい時。俺は力が湧いてくる。それは事実。
どんな時でも。俺は闇が恐い。それも事実。

果たして俺は、守りたい時、闇に飛び込む勇気があるのだろうか。
正直、恐い。

だが、これから戦う可能性があるエヴァンジェリンは闇の存在。
俺が恐れるもの自体だ。

それに俺は立ち向かえるのか。
いや、立ち向かわなければいけないんだろうな。

くよくよと悩むのは、俺の性に合っていないな。
悩むより先に、行動するか。

体力も大分回復し、俺は一気に駆け出した。

どうやらエヴァは誰かと戦っているようだ。
エヴァの魔力と誰かの魔力がぶつかり合っている。

場所は橋の辺り。
俺は橋に向けて足を進めた。

「……！」

俺の目の前では、丁度ネギ君がエヴァとの魔法合戦に負けるところだった。

エヴァの魔法を障壁で防ぐもモロに喰らい吹き飛ばすネギ君。
傍にいたアスナさんが駆け寄る。

ザワ…。

なんなんだ。

なんでこんなにも悔しいんだ。

恐くないのか、俺。

恐いはずだろ、俺。

だが、恐怖という感情は何処かに飛んでいったようで、俺はただ、
ネギ君の安否、そして、エヴァと戦わなければという気持ちだけだった。

俺に気がついたエヴァはこちらを見てワザとらしく高笑いをする。

「ハハハハハ！ 遅かったじゃないか櫻井悠也！ ネギ先生はもう
倒させてもらったよ！」

…。
俺は無言を返事として返す。

「さてと…ネギ先生の血…さぞかし旨いことだろうな…」
「マスター」

「なんだ？ どうした茶々丸…！？」

寸前のところで、エヴァは俺の斬撃を避ける。
さすがは「闇の福音」。

そう簡単に攻撃を当てさせてもらえない。
再び斬撃を繰り出す。

エヴァはそれを避け、反撃に転ずる。
あれ？

いつもより、相手の攻撃が遅く見えた。

俺はエヴァの反撃を避け、

「牙竜刃！」

竜の牙を思わせる強力な斬撃をエヴァに繰り出す。

だが、まだ当たらない。

相手の攻撃を遅く見えるのに、こちらが攻撃をする際はなぜかわわらない。

近距離戦では勝機がないと悟ったエヴァは、魔法に転じる。
素早く詠唱を終え、呪文を唱える。

「魔法の射手・連弾・氷の17矢!」

氷の矢が飛んでくる。

やはり遅い。

とは言っても止まって見るとかではなく、単に遅く見えるだけ。避けないとあの矢に貫かれてしまう。

数が数だけあって、全部を回避することはできず、数本が俺の肌を掠める。

エヴァは余裕そうにしている。

「ハハハ! 所詮貴様みたいな臆病者が、私を倒すことなどできないんだよ!」

その言葉が、何かの引き金になったのかもしれない。

今までだって、臆病者と言われたことは何度かある。

もう聞き慣れて、言われたところでどうってことなかった。

なのに、エヴァから発せられた”臆病者”という言葉はあまりにも俺の心に響いた。

なぜだ?

予想はできている。

今までは、俺をそう呼ぶ奴は大体どうでもいい奴だ。

確かに、エヴァにとって、俺はどうでもいい人かもしれない。

けれど、俺にとってエヴァはクラスメイト。繋がりのある人だ。

だからこそ、彼女を闇から連れ戻してみたいと思う。

だからこそ、彼女を倒せねばと思う。

思ったよりも晴れた気持ちで、俺は呪文を唱えた。

『断罪の炎！』

剣に纏われる炎。

氷属性を得意とするエヴァにとって炎は相性が悪いはずだ。
俺は剣を構え、一気に攻撃に転じる。

「火竜双爛！」

炎を柱とする二極の斬撃が、エヴァに向かっていく。
しかし、『闇の福音』の異名をもつエヴァンジェリン。
闇属性の「魔法の射手」で、俺の攻撃と相打ちさせる。

なんだろう。

恐いのに。

なのに、なぜか恐くない。

恐怖はもうない。

ただ、戦うこと。

エヴァと戦うことがなぜか楽しくなる自分がいた。

エヴァンジェリンもまた、なぜか嬉しそうな表情だった。

譲らない攻防を繰り返す、俺とエヴァ。

ネギとの戦いのせいかな、エヴァの動きにキレがなくなっているが、それは俺も同じ。

先ほど戦った人形と先ほどまでであった恐怖の重圧からの開放感が疲労となつて俺を襲ってきた。

次で決着をつける。

俺もエヴァもそう思ったようだ。

間合いを開け、エヴァは呪文の詠唱に、俺は気と魔力の集中に入る。

限りある永遠が続く。

音もなく、沈黙がその場に留まる。
そして。

『闇の吹雪!!』

呪文を唱え、エヴァの両手から、氷と闇が合わさった術が放たれる。
俺も溜めていた気と魔力を一気に放った。

「焰皇天龍翔!!」

焰を纏い、舞い上がる天の龍が俺の剣より放たれる。
ぶつかり合う二つの力。

ものすごい轟音が鳴り響いている。

もう…限界だった。

気も魔力も尽きそうだ。

エヴァンジェリンも同じ。

お互い、最後の力を振り絞り、技に全力を注ぐ。
そして…。

決着がついた。

反動で吹き飛ばされる俺。

空中に吹き飛ばされるエヴァンジェリン。

相打ちだった。

息切れがすごかったがそれでも、俺はなぜか晴れた表情だった。
が、次の瞬間。

「うわああああっ!？」

突如悲鳴を上げるエヴァンジェリン。

停電が復興した。

エヴァにかかっている呪いが再び発動したのだ。

水面に向かって真っ逆さまに落ちるエヴァンジェリン。

ネギ君が杖に跨り、エヴァを救出した。

橋まで戻ってきて、エヴァをそつと橋に立たせる。

いそいそと、茶々丸が駆け寄り、エヴァにコートを羽織らせる。

呪いの発動と関係性は見当たらないが、エヴァは裸になっていたのだった。

俺としては、もう少し拝みたかったが、さすがに後が怖い。

エヴァは理解不能、と顔に表れた表情をし、俺たちに聞いてきた。

「なぜ…私を助けたのだ？」

「え？ それはエヴァンジェリンさんは僕の大事な生徒ですよ？」
「ああ、それに俺やアスナさんのクラスメイトだしな」

と、ネギ君はいつも通り、俺は若干カツコつけて言ってみた。

しかし、エヴァはネギ君のほうに興味があるらしく、俺のセリフは耳に届かなかったようだ。

腹が立った俺は、とりあえずエヴァを睨んだ。
上から、下まで。

と、俺の視線にエヴァは気がついたんだろう。
ものの見事に俺に拳を叩き込んだ。

その場に蹲る俺。

フン、とそっぽを向くエヴァ。

戦いが終わり、ささやかな安らぎが俺を、みんなを包む。

が、それも長くは続かなかった。

安らぎは、翌日には消え去ってしまうのだから。

第十一話　真相×真実

翌朝――

腹が立つくらいに清々しい朝である。

そんな清々しい朝は誰にも訪れる。

それは俺にも同じ。

が、俺はそんな望んではない。

むしろ台風辺りが起こって学校中止になってほしいものだ。

なにせ…昨日の今日で相当の体力を消費したからな。眠くて眠くてしょうがない。体が重い。

なぜ俺がこんなにも苦しんでいるのか？

それは今日が…学校だからだ。

『麻帆良の軌跡』

「……なぜ、今日はこんなに天気がいいんだろうな……」

先ほどから一向に俺はベッドから出ようとしな

い。それもそう

だ。昨日あれほど頑張

って戦ったんだ。ネギ君と戦ったから

と言う理由もある

が、一応あのエヴァンジェリオンと引き分けたのだ。これはもう疲れない方が可

が。

こんな俺の努力に対して一遍の慈悲もなく、今日もまた学校とやらが始まってしまふのだ。

ああ……憂鬱だ――

٧٠

今部屋のドアが開いた音がした。
多分気のせいだろう。疲れているせいだ。

「…今日はサボつてもネギ君も文句言わないだろ…エヴァと引き分けるまで戦ったんだし…」

٧٠

自分自身に強く言い聞かせた。
さて早速寝直そうと布団を被り直したその時――

「随分と余裕だな、櫻井悠也」

「うおわ ああ ああ ああ ああ ああ つ！？」

心臓が飛び出るかと思ったという言葉は、まさしくこの時に使用するものだと言は悟った。

なにせ現在、昨日お世話になったエヴァンジェリンその人が、俺がかぶり直そうとした布団を剥ぎ取り仁王立ちしているのである。とりあえず、俺はこう質問しよう。

「何をしているんだ？」

と。

人として当然の反応だろう。

それに対してエヴァは、フン、と鼻を鳴らして満更でもなさそうな表情で――

「貴様を起こしに来た」

「…何故に？」

「グ…！　そうジジイに頼まれたんだ！　お前はいいから黙って起きろ！」

そっいつて布団越しに俺の腹部を踏みつけてくる。踏まれては起きられませんよ。

にしても何事だ。

エヴァが学園長の頼みを聞くことも珍しいのに、それも俺を起こしに来ると言う用件を飲み込んだのだ。

本日のエヴァは一味違う。のか？

が、その考えはどうやら違ったようだった。

「勘違いするんじゃない。私が貴様に別件で用があるからそのついでだ」

「ああ…なるほどね」

一気に冷めた。

ワザとでもいいから、ちょっとでもいいから、そつぽを向き「アンタなんかのためじゃないんだから！」と、顔を若干赤らめて言ってくれないだろうか。

まあエヴァに対してその言葉を要求するのはあまりにも酷であることは承知済みであるが、それでも男である俺はそういったセリフとかに懂れてしまうものだ。

しかもエヴァはけっこうな美少女。

言ってくれたら男は一撃かもな。

「とりあえず、さっさと支度をしないか櫻井悠也。ジジイが待っていたぞ」

「…了解…」

昨日の戦いが嘘のような態度のエヴァではあるが、それでも怖いことに変わりはない。

俺はその言葉に従うべく、いそいそと着替えなどの身支度を始めた。

ちなみに、学園長の用件というのはあまりにもしょうがなく、年齢制限有りの雑誌を俺に買って来いとのことだ。

そのようなことで俺の睡眠を妨げられたかと思うと、無償に腹が立った俺は、学園長室でその怒りの矛先を学園長に向けて放っていた。気がつくともうチャイムが鳴っており、結局エヴァの用件というのは本日の放課後に持ち越しとなった。

そして放課後――

麻帆良市内にある洒落た喫茶店に俺となぜかネギ君も呼び出された。俺とネギ君は、お互いに顔を見合わせながら、理解できないこの状況から何とか打開策を見つけるべく、伝言の茶々丸によって指定された喫茶店に向かって早足で向かった。

急いで喫茶店に着くと、エヴァが店自慢のブランドコーヒーを見せ付けるかのように囁いていた。
てめえこっちは必死になって来たって言うのに……。
今なら弱っているし、昨日の決着つけてやろうか？
が。

今はとりあえずそのようなことは置いておこう。
エヴァがわざわざ呼び出すのだからそれなりに重要な用件なのは察知できる。

俺とネギ君は、エヴァが座っている丸テーブルの開いている二つの席にそれぞれ座った。

俺たちが席に着くと、コーヒーを置き、早速エヴァは喋りだした。

「悪いな。今日は来てもらって」

朝も思ったが今日のコイツの態度はなんだ？

昨日の傲慢さは嘘みたいは何処かに消えていた。

「昨日のことなんだ。今日はそれで集まってもらった」

やはりそんなところか。

ネギもそれを予想していたのか、まだ冷静だった。

「実は…昨日のこと。アレはある人物に指示されて行なったんだ」

それはさすがに予想外だった。

色々予想外ではあったが、その中でも二つ予想外なことが。

まず昨日のことが誰かにより仕組まれていたこと。

それはある程度理解ができる。

俺技とエヴァの術が相殺した後、エヴァがいきなり呪いに襲われたことだ。

もし呪いがもうすぐ元に戻ると知っていたら、俺とあんな上級技合戦をするわけがない。

それに茶々丸もいるので、停電が復興するまでの時間を性格に計れるハズだ。

が、それができていなかった。
計算外だったのだろう。

そして二つ目。

エヴァが人の指示を忠実に実行したこと。
なんらかの取引だったのかもしれない。

条件があつたのかもしれない。
しかし、あのエヴァンジェリンが素直に言うことを聞くとは思えない。

催眠などに掛かっている様子はないことから、エヴァは自らの意思で、昨日その何者かの意思に従い、俺たちと戦ったわけか。
だが何故？

その何者か知らないが、ソイツがわざわざエヴァを使ってまですることが何なのか理解ができない。
ここはとりあえず、エヴァに色々と質問をして、このモヤモヤを晴らすことから考えよう。

「で、その何者かって言うのは本当に何者なんだ？」

エヴァがこちらに視線を移す。
さすがにいきなり過ぎたか。

だが、エヴァは俺をじつと見つめたまま、口を開いた。
その時。

いきなりエヴァが頭を抱え込んだ。

本当にいきなりだったので、驚いた俺とネギ君。

ネギ君は驚いたまま椅子に座り、ひたすらエヴァの名前を呼んでいる。

俺はエヴァの背中に回り込み、肩を揺すってエヴァに呼びかけている。

するとエヴァは我に帰ったようで、抱え込んでいた両手をゆっくりと離し、身を起こす。

辺りをキョロキョロとし、俺とネギ君を交互に見比べた後――

「私は……一体何を――」

なんていいだしやがった。

エヴァンジェリンに嘘をついている様子はない。

完全に素で忘れているようだった。

エヴァは状況が飲み込めないようである。

もはや今のエヴァに質問してもしょうがないだろう。

その悟ったのは茶々丸も同じのようで、エヴァは別荘に連れて帰った。

そして喫茶店の丸テーブルには俺とネギ君だけが座っている。

「悠也さん」

「どうした？」

「これから……何が起ころうとしているんですかね……」

「……さあ……」

それくらいしか、俺は言うことができなかった。
もちろん「さあな」という言葉にすら自信がない。
状況を飲み込むので精一杯だった。

エヴァンジェリンの身に起こったこと。

そしてこれから怒るかもしれないであろうこと。

夕方の麻帆良市内。

風が吹き、俺たちはその風に当たっていた。

第十二話　真夜中の戦い

結局エヴァが去った後、俺とネギ君もすぐにその場を去った。ネギ君はまだ学校に用事があるからと、駆け足で戻っていった。俺も暇なのでさあ帰ろうと現在自分が住んでいる寮に足を向けようとした。

『麻帆良の奇跡』

呼び出しをされた。

校内放送で。

内容はこうだ。

『麻帆良学園中等部、桜井悠也君。至急職員室まで来てください。未森先生が呼んでいます』

二回繰り返された。朝倉さんが放送したようだ。俺はまず、必死に頭を回転させる。

自分が未森先生に呼ばれているか考えるために。というか。

自分と未森先生との関係深いものではない。むしろ無関係に近い。

担当する学年も違う。

俺は3年だが、未森先生は2年部担当だ。

唯一ありそうな関係といえば、未森先生が英語科の教師だということ。

そのせいか、ネギ先生との書類交換などもたまに行われている。

そして、その書類交換の際、未森先生がネギ先生に書類を渡すのに、たまにだが俺を使う。

普段は職員室で渡し合うらしいが、たまに予定が合わない時は必ずといっていいほど俺に書類を渡す。

なぜだ？

理由がわからないまま、俺は職員室に足を運んだ。

「失礼します」

「アラ…櫻井君。ゴメンね呼び出して」

職員室に向かう途中、男子生徒に睨まれた。何回も。

この未森先生は若く、ものすごい美人であり、また出るところも出ている、男性にとつては理想の体型である。

教師内では、しずな先生並みに人気で、二人を並ばせたらいろんな意味で大変なことになるといわれるほど。

そのせいか、生徒からも絶大な人気を誇るこの未森先生は男子生徒には当然の如く人気であり、一般生徒にしてみれば、未森先生に呼び出しされるなど、天にも舞い上がるほどの気持ちになるらしい。

が、俺は正直あまり興味はなく、廊下を渡る際も平然とした顔で歩いていた。

すると案の定、男子生徒からの痛烈な視線を浴びる羽目となった。

「今日もまたネギ先生への書類ですか？」

基本的に未森先生が呼び出す時は書類関係だ。

だが、呼び出すといつても普段は男性教師にお願いして俺に来てもらうようにしていて、構内放送で呼び出されるのは俺も初めてであり、少々緊張していた。

「違うの。実は頼みがあるんだけど…」

まるで少女がおねだりするような声音と仕草。

さすがの俺もこれには少々弱い。

二人が人気といっても、その人気のあり方は実に対象的で、しずな

先生は大人の魅力。

未森先生はどちらかと言うと幼さが残る。

美しさがしずな先生、可愛さが未森先生といったところだ。
どちらにせよ美人だということに変わりはない。

「今日の夜に会えないかしら？ 二人きりで」

「え……？」

状況の理解に数秒掛かった。

これはお誘いと解釈していいのだろうか？
いや。そうとしか聞こえない。

俺は断る理由もなく、その愛らしさがある年上の女性に向けて無言で肯いた。

「よかった。じゃあ夜中の0時に世界樹の麓で」

一瞬、時間と場所に戸惑いがあったが、それでもこの愛らしい笑顔に俺は見事に騙され、再び無言で肯いた。

「用件は終わり！ じゃあね、櫻井君」

「…はい」

俺は職員室を後にする。

さっきまでは浮かれた気持ちが先立って肯いてしまったが、よく考えて見ると怪しい要素が多すぎる。

まず夜中に呼び出すということ。

わざわざ夜中でなくてもいいはずだ。

次に世界樹の麓だということ。

広い間帆良市内の外れにあるのが世界樹である。

その麓も確かに世界樹よりは市内に近いが、それでもけっこうな距離がある。

俺の寮はもちろん、教員宿舎からも距離はある。

さらに、その麓には何も無いこと。

公園でもなければ、草花がたくさん咲いているわけでもない。ただ世界樹に向かうためだけにある、何もない野原のような場所だった。

まるで戦うためにあるような――

戦い？

…まさかな。

「…さん！ 悠也さん！！」

「うおっ…どうしたネギ君？」

「さっきからずっと呼んでましたよ。どうしたんですか？」

考え事をしているせいで気がつかなかった。

現在俺はこのかさんに晩飯をご馳走になっている。

たまに料理が作るのが面倒になるときよくここに食べにくる。
ほとんどが休み前に来る事が多くて、かえるのも面倒なのでそのまま泊まることもある。

最初、アスナさんは嫌がっていたが、いまでは居て当然のような振る舞いである。それはとても有難いことだ。

「すまん…ちょっと考え事をだな…」

と、適当に誤魔化す。

一応間違っではない。

次の日が休日なだけあって、今日はけっこう騒いでいた。

が、11時ごろにはネギ君がまず力尽き、アスナさんが力尽きる。

このかさんも眠そうな目を擦りながら家事を済ませ、ベッドに向かおうとするが、途中で力尽きる。

しょうがないのでベッドまでこのかさんを抱きかかえ運ぶ。

このかさんは細くてとても軽かった。

それにものすごくいい匂いがして、この無防備な状態をいいことに襲ってしまいそうだった。

時間は11時30分。

今から麓に向かえば丁度いいところに着くだろう。

俺は部屋をゆっくりと後にする。

さすがに全く物音を立てないことはできず、若干音を立ててしまった。

が、気づかれてないだろう。俺は部屋を後にする。

「あり…？　悠也の兄貴…？」

微かに力モの声が聞こえた気がしたが、気のせいと受け止めよう。

時間ぴったり、俺は0時ジャストに麓に着く。
すでにそこには身森先生が立っていた。

「すみません。遅れてしまって…！」

「ううん。私も今来たところだよ」

相変わらず優しい人だ。

効果音を付けるとしたら、ふわふわ、が妥当だろうな。

「じゃあ、いこっか」

そういわれ、俺は未森先生の隣を歩き、世界樹に向かう。

しばらく登ると、すぐに世界樹が見えてきた。

俺は世界樹を背凭れに縋る。

未森先生も俺の隣に来て同じように縋る。

どうにも気になってしょうがない俺は質問することにした。

「あの…今日は一体何の用なんですか？」

「クス…それはね…」

”この”無邪気な笑顔を見るのは、これで最後となった。

気がつけば俺は転げるようにその場から離れた。

右肩には切り傷のような傷があり、血が流れている。

状況の理解に時間が掛かった。

理解したときには二発目の斬撃のようなものが、俺を掠める。

なんとか距離を置く。

「クス…アナタを殺すことよ。私の同士」

「…なんの真似ですか？ …未森先生…」

未森先生は笑みを浮かべる。

だが、先ほどまでとは違う、無邪気な笑みは完全に消えている。
代わりにその笑みには…明らかな殺意が籠っていた。

「さあ始めましょう。私の同士。 大罪の代行者 ！」

長い夜が始まった

第十三話　世界樹の下で

俺はなんとか思考を働かす。

とりあえず引つかかることばかりではあるが、その中でも特に引つかかる単語があった。

大罪の代行者。

一体…何者なんだ。未森先生は…。

　　～麻帆良の奇跡～

空を切る音がある。

そのたびに俺は回避動作を全力で行わなければならない。
が。

未森先生と俺との距離は、避ける動作を加えながら後ずさる俺に対して、先生は攻撃に徹するのみ。

ジリジリと俺との距離が詰められる。

そして―

「……！」

左肩の服が裂かれる。

紙一重で肌には触れなかったが、本当に紙一重だった。

後少し後退が遅れたら、服と同時に左肩が重症になるところだった。

「ウフフ……」

そんな不適な笑みを浮かべる。

先ほども、そして職員室でいつも見せていたあの無邪気な笑顔の面影はどこにも残っていない。

それどころか、今の笑みには邪悪な物も残っている。

「くっ……！ 一体なんなんですか先生！ 俺を攻撃する理由を教えてください……！」

「ウフフ……それはアナタが 大罪の代行者 の裏切り者だからよ！」

そういつて再び襲い掛かってくるが、焦っているのか、いささか攻撃が単調になっていた。

横一閃に切り裂こうと、左手を勢いよく横に振る。

が、その一撃は空を切り、俺は懷に飛び込み蹴りを叩き込む。

蹴りにより、わずかではあるが、飛ばされた先生。

間合いができる。

それにしても、また現れた単語。 大罪の代行者。
代行者…？

脳内を何かが過ぎる気がした。
見慣れない光景が視界に現れた気がした。

―炎が燃え盛る。 家が、人が全てが焰に飲まれている―

―子供を抱えた女性がいる。 それに近寄る少年がいた―

―「止めて！ せめてこの子だけは…！」 女性は必死に少年に講義
する―

―「……」 無言と刃を振るう音が返事となって返ってきた―

―焰の赤とは違う。 血の赤が飛び散る。 少年は笑みを浮かべる。―

―そして少年は…―

激痛が頭を襲う。

一体なんだったんだアレは。

が、そんな考えをする余裕もなかった。

右肩の服が裂かれ、その下に広がる肩の肉が裂かれる音がした。

「ぐあああつ！」

傷口から溢れる血など気にも留めず、俺はその場に転がるように倒れる。

地面に広がる自分の血液。

未森先生は一旦俺と距離を置くように、世界樹の元に飛び移った。

自らの爪に滴る俺の血液を絶品料理を食すかのように丁寧に舐める。

そうかー。

「先生がエヴァに指示を出したんですね…。それに…吸血鬼ですか？」

「フフ…もう気づいちゃった？ よく見てるわね」。先生恥ずかし
い」

心にもないことを。

先生の笑顔が消えてから、先生の言動が上辺だけの会話になってい

るのは気づいていた。

とりあえず。わかったことが一つ。

先生は本気で俺を殺すつもりなんだ。
人を殺すにはそれなりの決意がいる。

つまり先生も本気だ。

いつまでも回避に徹していて勝てるような相手じゃないのは雰囲気
でわかる。

こちらも本気にならないといけないようだ。

俺は刀を”召喚”する。

「フフ…じゃあ死んで！」

両の腕の指から伸びる鋭い爪をかざし、俺に切りかかる。

いつまでもやられる俺じゃない。

こちらも反撃に転じる。

「爆竜剣！」

爆撃を含んだ斬撃をお見舞いした。

爆風によって吹き飛ばされたが、ほぼ無傷のようだ。

どうやら相当強力な魔法障壁を張っているようだ。

それなら――

――雷の象徴がヴォルト。その断罪の極雷、我が剣に宿せ、轟の光、

鳴り響け―

「断罪の雷！！」

刀に雷が宿る。

風、炎に続いて雷の精霊術。

破壊力に特化していて、威力なら炎に勝る。

俺は一気に先生との間合いを詰め、攻撃に掛かる。

「豪雷斬！」

振り下ろした剣に続いて雷が降りかかる。

が、羽でも生えているのかと思わせる身軽な動きでそれを全て避ける。

「クス…もう終わり？」

「―まだまだ！ 爆臥雷竜刃！」

刀を振る。

振った箇所から広がりながら雷が降ってくる。

そして地面に堕ちた瞬間に爆発が起こる。

よほどでもない限り完全回避は困難だが、それを未森先生は平然とこなす。

「うん…ちょっと期待外れかな。仮にも代行者の一人だったのに…。うん、もうお終いにしようか」

不満そうな顔をする先生。
もちろん、上辺だけ。

「ふざけるな！　まだこれから…」

最後まで喋られてくれなかった。
未森先生は気がつけば自分の懐にいるのだから。
飛び切りの不適な笑みを浮かべて―。

「ブラッドクロスー！！」

目にも止まらない速さの斬撃を瞬時に繰り出した。
気がつけば、俺は悲鳴を挙げていた。
血が、体の至る所から流れる。
正直即死するのではと思うほどだ。
立ち上がることを忘れ、俺はその場に倒れた。

「フフ…これでおわり」

上辺だけの笑みを浮かべて、右手の爪を重ね、一本の刃に変える。
マズイ。

本当に死ぬ。

先生から放たれる明らかな殺気に俺は初めて恐怖を抱いた。
もう駄目だ―。

「魔法の射手・連弾・雷の17矢!!」

雷の矢が、未森先生の即部を襲う。

俺から見てマウントポジションを確保していた先生は一気に飛び退く。

俺は術を放った主を探す。

まあ、わかってる。

この声。この魔力の感じ。

ネギ・スプリングフィールド―。

「僕の生徒への手出しは許しませんよ!!」

年下の子がここまで頼りになるとは思わなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6409e/>

麻帆良の軌跡

2010年12月4日04時41分発行